中ノ谷遺跡発掘調査報告書

2023年３月

桑名市教育委員会

中ノ谷遺跡発掘調査報告書

二〇二三年三月　桑名市教育委員会

巻頭図版



発掘調査区全景（北から）

序

桑名市の北部に位置する多度地区は、西に多度山を仰ぎ、東には木曽三川を挟み、広大な濃尾平野を臨むことができます。豊かな自然に囲まれた当地では、古来より多様な文化が育まれてきました。多度山周辺の丘陵部には、古墳や集落、古代寺院など多くの遺跡が広がっていることが知られており、これまでに市内有数の集落遺跡である天王平遺跡などで発掘調査が実施されてきております。

本書は、土地区画整理事業の工事に先立ち実施した中ノ谷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。調査では、竪穴建物や古代の遺物が確認され、古代を中心とした集落跡であることが分かりました。今後、こうした調査成果を通じて、地域の歴史の解明や文化財保護に対するご理解が深まる一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご理解やご協力をいただいた関係の各機関の方々や地元の皆様には厚く御礼を申し上げます。

令和５年３月　桑名市教育委員会

教育長　　加藤　眞毅

例　　言

1．本書は、三重県桑名市多度町小山字中ノ谷、字東塚原に所在する中ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、小山土地区画整理事業に伴う事前の緊急調査として、原因者による費用負担を受けて行った。

3．現地での発掘調査は、令和３年12月２日から令和４年３月１日にかけて実施した。

4．発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	桑名市教育委員会
調査受託機関	株式会社文化財サービス
調査員	濵辺一機（桑名市市長公室ブランド推進課）

5．出土遺物の整理作業および、報告書作成業務は、現地調査終了後の令和４年度に行った。出土遺物の実測および遺物の写真撮影は、株式会社文化財サービスに委託した。

6．本報告書は、濵辺一機と竹内英昭が執筆し、全体の編集は濵辺がおこなった。執筆分担は目次に記した。

7．発掘調査にあたっては、下記の機関からご協力をいただいた。

小山土地区画整理組合、株式会社ケイ・エム・ジー、アール・アイ・シー・マネジメント株式会社、
日本国土開発株式会社、桑名市都市整備部都市整備課

8．本調査は、多度町小山土地区画整理組合の文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して深く御礼申し上げる。

9．本調査に関する記録及び出土遺物等の諸資料は桑名市教育委員会で保管している。

10. 本書で使用した遺構略号は、以下の通りである。
ＳＨ―竪穴建物、ＳＡ―柵列、ＳＫ―土坑、ＳＤ―溝

11. 本書で示した方位は、全て座標北である。標高値については、T．P.（東京湾平均海面）を基準とした。

12. 本書で使用した土層や遺物等の色調については、小山正忠・竹原秀雄2007『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

目　　次

第１章　調査の経過

１．調査に至る経緯 ……（濵辺）…１

２．文化財保護法における諸手続き ……（濵辺）…１

３．調査方法 ……（濵辺）…１

４．調査経過 ……（濵辺）…２

第２章　位置と環境

１．地理的環境 ……（竹内）…５

２．歴史的環境 ……（竹内）…５

第３章　層位と遺構

１．基本層位 ……（濵辺）…８

２．検出した遺構 ……（濵辺）…12

第４章　出土した遺物 ……（濵辺）…22

第５章　まとめ ……（濵辺）…28

図　目　次

図１　遺跡位置図 …… 3
図２　発掘調査区位置図 …… 3
図３　グリッド配置図 …… 4
図４　周辺遺跡位置図 …… 7
図５　遺構全体図 …… 9
図６　南北断面土層図 …… 10
図７　東西断面土層図 …… 11
図８　ＳＨ１・２遺構図（１）…… 13
図９　ＳＨ１・２遺構図（２）…… 14
図10　ＳＨ１遺物出土状況図 …… 15
図11　ＳＨ３遺構図 …… 16
図12　ＳＡ１遺構図 …… 17
図13　ＳＡ２遺構図 …… 18
図14　ＳＡ３遺構図 …… 19
図15　ＳＫ１～３遺構図 …… 20
図16　ＳＫ４・５遺構図 …… 21
図17　出土遺物実測図（１）…… 24
図18　出土遺物実測図（２）…… 25
図19　中ノ谷遺跡と南小山廃寺 …… 29

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表 …… 6
表２　土器観察表（１）…… 26
表３　土器観察表（２）…… 27
表４　石器、石製品観察表 …… 27

写真図版目次

図版１　発掘調査区遠景、全景 …… 31
図版２　発掘調査区近景 …… 32
図版３　ＳＨ１・２（１）…… 33
図版４　ＳＨ１・２（２）…… 34
図版５　ＳＡ１、ＳＫ１ …… 35
図版６　ＳＫ２～５、発掘調査区近景 …… 36
図版７　出土遺物（１）…… 37
図版８　出土遺物（２）…… 38

第１章　調査の経過

１．調査に至る経緯

中ノ谷遺跡は、桑名市多度町小山字中ノ谷、東塚原に所在し、肱江川の北岸に広がる通称、小山丘陵の南斜面に立地する。遺跡の規模は東西約110m、南北約330mとされる。当遺跡の周辺には谷を挟んで東側に南小山廃寺、西側には大久保古墳群が近接する。中ノ谷遺跡の周辺では、平成８～10年に多度町教育委員会が詳細分布調査を実施し、須恵器や土師器、山茶碗、陶器など古代から近世までの遺物が確認され、須恵器類が多数採集された。

当遺跡の所在する小山丘陵の南側では、住宅地の供給や工業用地の整備を目的として、土地区画整理事業が計画され、事業予定地が中ノ谷遺跡及び南小山廃寺の範囲に該当することが明らかとなった。平成10年に多度町教育委員会が試掘調査を実施し、調査の結果、南小山廃寺では遺構が確認されなかったが、中ノ谷遺跡では建物跡と想定される柱列が確認された。その後、試掘結果をもとに関係機関と協議が重ねられ、令和３年に遺跡の現状確認や本調査範囲等の絞り込みを目的として、桑名市教育委員会が詳細確認調査を実施した。調査の結果、南小山廃寺と新たに調査を行った大久保古墳群については、明確な遺構がなく、遺物包含層も確認できなかった。中ノ谷遺跡については、設定したトレンチで、溝や土坑等の遺構や土師器、須恵器など古代を中心とした遺物が出土した。平成10年度の調査結果も踏まえると、試掘坑TP６付近では古代遺構が良好に残存することが想定された。こうした調査結果をもとに、多度町小山土地区画整理組合や関係機関と遺跡の取り扱いについて協議が行われた。遺跡範囲の南側は緑地帯として現状保存されることになったが、北側は工事の影響が避けられないため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

２．文化財保護法における諸手続き

本工事については、多度町小山土地区画整理組合理事長から三重県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第93条に基づく、三重県文化財保護条例第48条第１項の規定により、埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘届（令和３年２月17日付けブ第616号）が提出された。同法第93条第４項の規定に基づき、県教育長から組合理事長あてに、発掘調査の実施を求める通知（令和３年２月25日付け教委第12―3858号）があった。組合理事長は桑名市教育委員会に発掘調査の実施を依頼した。それを受け、桑名市ブランド推進課は、調査着手後、文化財保護法第 99条第１項の規定に基づく発掘調査の報告（令和３年12月１日付けブ第492号）を、県教育長に提出した。

３．調査方法

発掘調査は区画整理事業に伴い、道路等が建設される部分を中心とした、1,189㎡を対象として実施した。発掘調査区は、国土交通省の定める平面直角座標系の第Ⅵ系に基づいて、地区設定を行った。また、遺構の記録や遺物取り上げの基準として、発掘調査区内に４m四方のグリッドを設定した。各グリッドは東西方向が１～12までの数字、南北はＡＡ、Ａ～Ｎまでのアルファベットを付与し、北西隅の杭を起点とした。

調査記録のうち図化作業は、検出した遺構の重複関係等を記録するため、トータルステーション（TS）

による測量で略図作成を行った。遺構番号は、検出順に現場で通番を付与し、現地調査後の整理作業時に遺構種別ごとに番号の付け替えを行った。完掘した遺構については、TSによる測量を随時実施したほか、ドローンによる空中写真測量で遺跡全体の平面図を１/50の縮尺で作成した。個別遺構図や遺物出土状況図、土層断面図については、写真測量と手測り実測を併用して、１/10～20の縮尺で図化をおこなった。

遺構の記録写真は、フルサイズのデジタル一眼レフカメラで撮影した。遺跡全体の写真は、ローリングタワーで撮影し、遺跡の遠景写真や景観写真は、ドローンを用いて撮影した。

出土遺物の整理作業については、発掘調査と並行して、遺物洗浄や注記作業を中心とする一次整理作業を行った。発掘調査終了後は、桑名市埋蔵文化財整理所で遺物の接合や実測遺物の抽出作業など基礎整理作業を行った。その後、遺物実測や写真撮影等の二次整理作業を行い、並行して遺物トレースや挿図作成など報告書の作成作業を実施した。

４．調査経過

現地での発掘調査は、令和３年12月２日より開始して、令和４年３月１日に終了した。
調査途中、発掘調査区の北端で竪穴建物を検出し、遺跡範囲の北側に遺構が広がることが予想された。そのため、本発掘調査と並行して、範囲確認調査を実施した。調査では南北方向のトレンチを設定し、遺構の有無の確認を行った。後世の削平が地山面のシルト層にまで達し、遺物包含層も残存していないことが判明した。

調査日誌（抄）

12月２日	現地作業開始。現況の地形測量を実施
12月６日	現場事務所の設置
12月８日	発掘調査区の設定
12月９日	重機による表土掘削を開始
12月13日	発掘調査区内にベルコン等の資材搬入
12月17日	人力による包含層掘削を開始
１月31日	発掘調査区の北部で竪穴建物を確認
２月17日	発掘調査区北側の範囲確認調査を実施
２月24日	発掘調査区内の遺構掘削、ほぼ終了
２月25日	発掘調査区の空中写真撮影および全体測量を実施
２月28日	竪穴建物の補足調査と平面測量。現地での発掘作業終了。
３月１日	資材撤収。発掘調査区の引き渡し

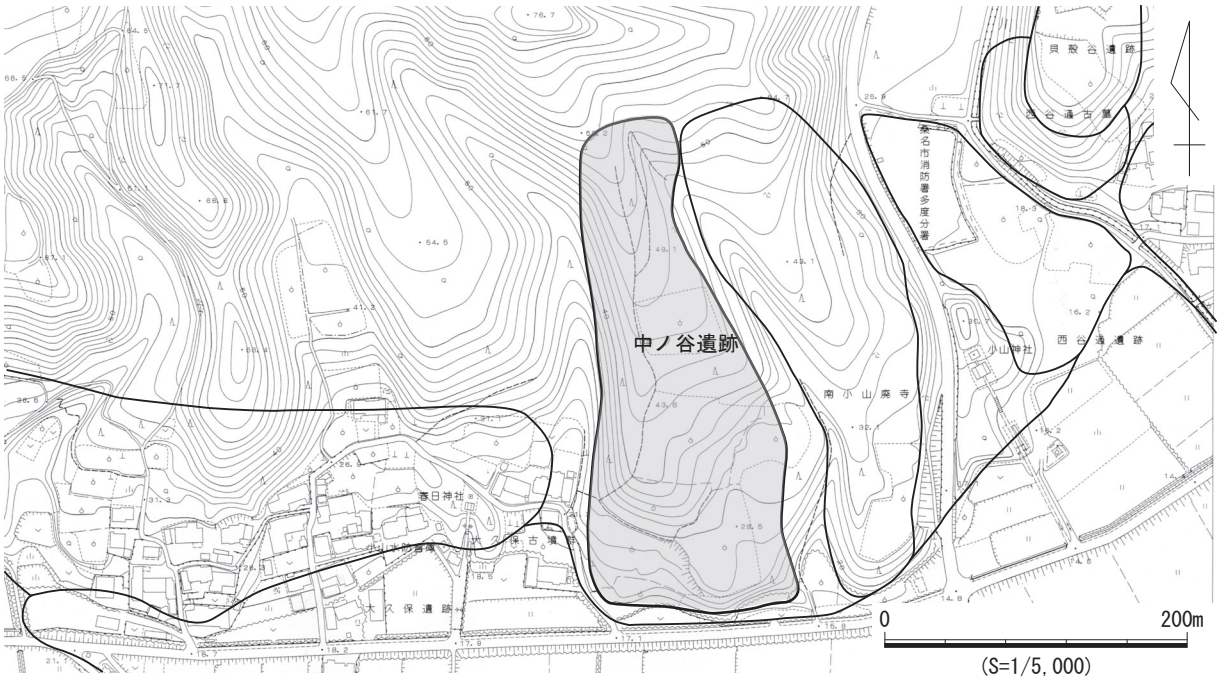


図１　遺跡位置図

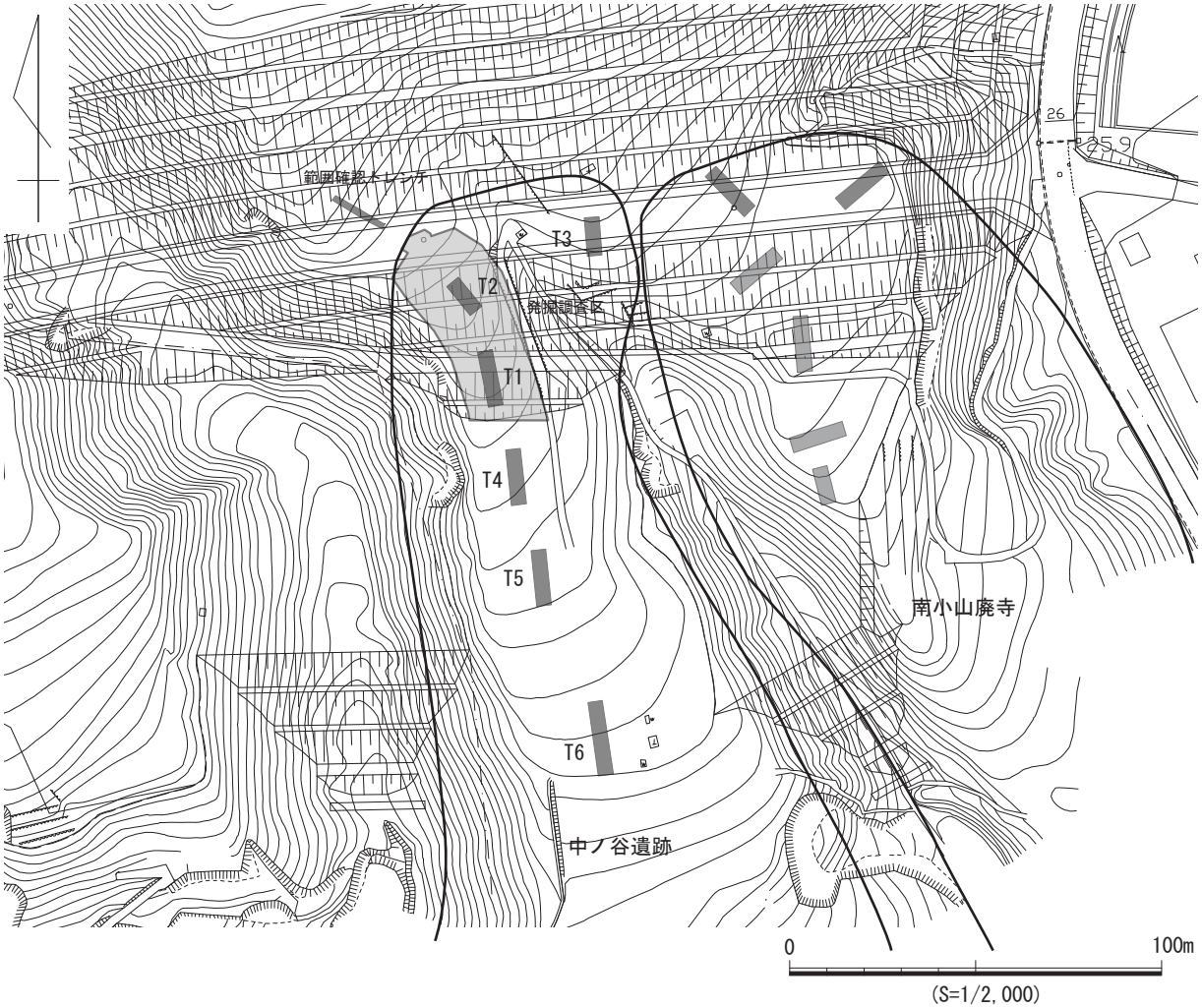


図２　発掘調査区位置図

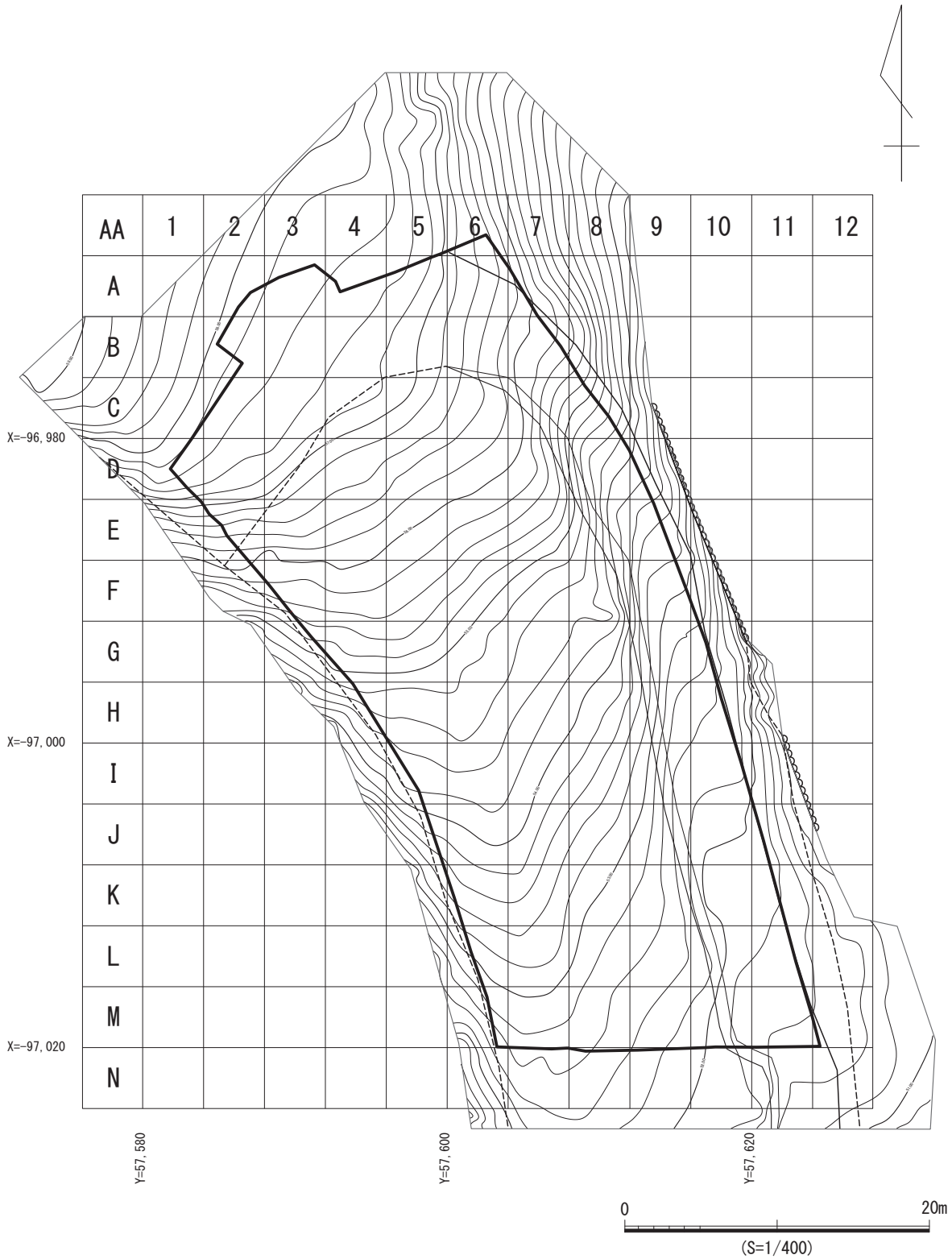

AA
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
X=-96,980
X=-97,000
X=-97,020
Y=57,580
Y=57,600
Y=57,620
0
20m
(S=1/400)

図３　グリッド配置図

第２章　位置と環境

１．地理的環境

桑名市は、三重県の北端部に位置し、北は岐阜県と東は愛知県に接する。市域の東側は、木曽･長良･揖斐川の木曽三川の河口部に位置し、濃尾平野の一角を占め、輪中景観を形成している。市域西側は養老山地の南端となる標高403mの多度山がそびえ、濃尾平野のほとんどの場所から望むことができ、地域のシンボル的な山であり、南麓の多度大社は、多度山をご神体として成立したとされる。

中ノ谷遺跡のある、小山丘陵は養老山地から源を発する多度川と肱江川に挟まれ、標高は30～100mほどである。多度山（大山）に対して小山と呼ばれるようになったといわれる。現在では、造成によって多くの部分が宅地などへと変貌をとげているが、丘陵の東側は段丘中位面が緩やかに傾斜して広がり、東端で段丘崖となっているのに対して、北側は多度川が狭長な谷を刻み、柚井から戸津にかけて扇状地を形成している。中ノ谷遺跡がある南側は、肱江川による比較的広い平野を形成し、水田が広がっている。

２．歴史的環境

小山丘陵周辺は、遺跡が密集して分布している。丘陵の西側に位置する寺山遺跡からはナイフ形石器が見つかっており、桑名市では珍しい旧石器時代の遺跡である。縄文時代は、天王平遺跡・寺山遺跡など数ヶ所の遺跡で遺物が見つかっているだけで、遺構は今のところ確認されていない。

古墳時代の遺跡としては、丘陵南側に大久保古墳群があるが、開墾などにより大半が滅失している。天王平遺跡第７次調査では、古墳時代の竪穴建物２棟が検出されている。

古代の遺跡では、丘陵南側に南小山廃寺がある。戦前から瓦や鴟尾が見つかっており、昭和60年の調査では単弁、素弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が出土している。天王平遺跡に包摂される位置に北小山廃寺があり、南小山廃寺と同文の軒丸瓦が出土しているが、遺構は見つかっていない。

天王平遺跡では奈良・平安時代の竪穴建物が多数検出され、第４次調査では10世紀代の古墓も確認されているほか、南小山廃寺の東側の丘陵でも蔵骨器が出土している。

桑名から養老山地北麓沿いを通り岐阜県垂井町を結ぶ街道は美濃街道と呼ばれ、壬申の乱の際に大海人皇子軍が往来した道と推察されている。当時の海岸線は、多度と対岸の津島の間であったと考えられ、古代の渡し場であった。時代を経るにしたがい、海岸線が移動して陸地化が進んだ場所は、人々の生活の場となり、中世以降、平野部には香取荘・野代荘・富津御厨などが成立した。そして、小山丘陵の東側には、馬場、藤塚、森下、尾津森遺跡があり、中世陶磁器が多く採集されている。

この他、中世の遺跡では同地域には多くの中世墓群がみられる。その内、小山丘陵北端の多度川に面する部分には祢宜谷中世墓群があり、古瀬戸や常滑焼の蔵骨器が出土している。五輪塔などの石塔もみつかっている。他の中世の遺跡では森下遺跡から室町時代の瓦など出土し、小山城跡・猪飼城跡などの城館跡も丘陵南側に位置している。

表１　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	遺跡種別	時期
1	中ノ谷遺跡	散布地	古墳～中世
2	柚井遺跡	散布地	縄文・古墳～中世
3	一ノ谷A遺跡（一ノ谷古墳群、経塚・中近世墓群含む）	散布地、古墳他	古墳～近世
4	一ノ谷B遺跡（一ノ谷古墳群含む）	散布地、古墳他	縄文・古墳
5	一ノ谷C遺跡（横山古墳群含む）	散布地、古墳他	古墳
6	関東遺跡	散布地	古墳～中世
7	宇賀神社古墳群	古墳	古墳
8	長尾遺跡	散布地	古墳～平安
9	長尾古墳群	古墳	古墳
10	宇賀A遺跡	散布地	古墳～中世
11	宇賀B遺跡	散布地	古墳～中世
12	宇賀C遺跡	散布地	古墳～中世
13	柚井城跡	城館	中世
14	愛宕中世墓群	中世墓	中世
15	西城古墳	古墳	古墳
16	多度経塚	経塚	平安
17	多度神宮寺	寺院	平安～中世
18	多度A遺跡	散布地	古墳～中世
19	多度B遺跡	散布地	縄文・古墳～中世
20	祢宜谷中世墓群	中世墓	中世
21	猫ヶ谷遺跡	散布地	平安
22	朝拝下遺跡	散布地	古墳～中世
23	宮地中世墓群	中世墓	中世
24	八壺口遺跡	散布地	平安～中世
25	八壺谷経塚	経塚	平安
26	八壷谷古墳・古墓	古墳、古墓	古墳・平安
27	西野遺跡	散布地	古墳～中世
28	寺山遺跡	散布地	旧石器・縄文平安～中世
29	北猪飼A遺跡	散布地	古墳・中世
30	北猪飼B遺跡	散布地	中世
31	西之河原遺跡	散布地	中世～近世
32	西田面遺跡	散布地	古墳～中世
33	猪飼城跡	城館	中世
34	砂田遺跡	散布地	古墳～中世
35	大久保遺跡・古墳群	古墳	古墳
36	宮前遺跡	散布地	古墳～中世
37	南小山廃寺	寺院	古墳～中世
38	西谷通遺跡	散布地	古墳～中世
39	西谷通古墓	散布地	古墳
40	貝殻谷遺跡	散布地	古墳～中世
41	小山城跡	城館	中世
42	東谷通遺跡	散布地	古墳～中世
43	林崎遺跡	散布地	古墳～中世
44	西天王平遺跡	散布地	平安
45	天王平遺跡	集落	縄文・古墳～中世
46	北小山廃寺	寺院	奈良、中世
47	尾津森遺跡	散布地	古墳～中世
48	馬場遺跡	散布地	古墳～中世
49	森下遺跡	散布地	縄文・古墳～中世
50	藤塚遺跡	散布地	縄文・古墳～中世
51	石坪遺跡	散布地	古墳～中世
52	下野代遺跡	散布地	平安～中世
53	石原遺跡	散布地	古墳～中世
54	星鳥遺跡	散布地	古墳～中世
55	御衣野遺跡	散布地	中世
56	大平遺跡	散布地	古墳～中世
57	駒ヶ谷遺跡	散布地	平安～中世


桑名市
多度山
多度大社
多度町多度
多度川
多度町北猪飼
多度町猪飼
多度町力尾
多度町小山
多度町戸津
多度町香取
多度町柚井
多度町御衣野
多度町下野代
多度町肱江
養老鉄道養老線
下野代駅
多度工業団地
多度第二工業団地
運動公園
採土場
琵琶池
山除川
赤沢川
0
1km
(S=1/25,000)
国土地理院　電子地形図（タイル）より作成

図４　周辺遺跡位置図

第３章　層位と遺構

１．基本層位

発掘調査区は、東西を谷に挟まれた尾根上に位置し、西側は崖状の急斜面となっている。現況は藪や山林で、一帯はかつて、蜜柑を中心とした果樹園として利用されていたと考えられる。調査区の東側には耕作に伴う農道や石垣が造られるなど、著しい改変が見られた。

発掘調査区の標高は53～58mで、北側と南側で比高差が大きい。地形的には、南側に向かって傾斜しているが、中央付近は北側より約1.5m低くなっており、中央部以南は緩やかな平坦面となっていた。この中央付近を中心に、柵列や土坑などの遺構を確認した。上段にあたる北側では、竪穴建物を検出したが、全体的に攪乱や後世の削平が著しく、地山の下層が表出する地点もあった。

以下、基本層位のうち主要な土層について詳細に記述する。

１層（表土層）　上層の腐植土および耕作土をまとめて表土層としている。調査区のほぼ全域で認められる。

２層（遺物包含層）　表土の直下で確認した。黄褐色粘質土やにぶい黄橙色粘質土が主体となる層で、調査区の中央付近から南側で確認した。層の厚さは、0.2～0.3mである。中央部を中心に、須恵器や土師器など古代の遺物が多く出土した。層の残りが悪く、良好に残存するのは調査区の中央付近のみである。

３層（地山層）　明黄褐色粘質土が主体となる地山層で、調査区のほぼ全面で確認した。上面で古代を中心とした遺構を検出した。調査区の北側では下層と考えられる白色のシルト層が広がっている地点もあった。調査区の南側では小礫が多く露出していた。

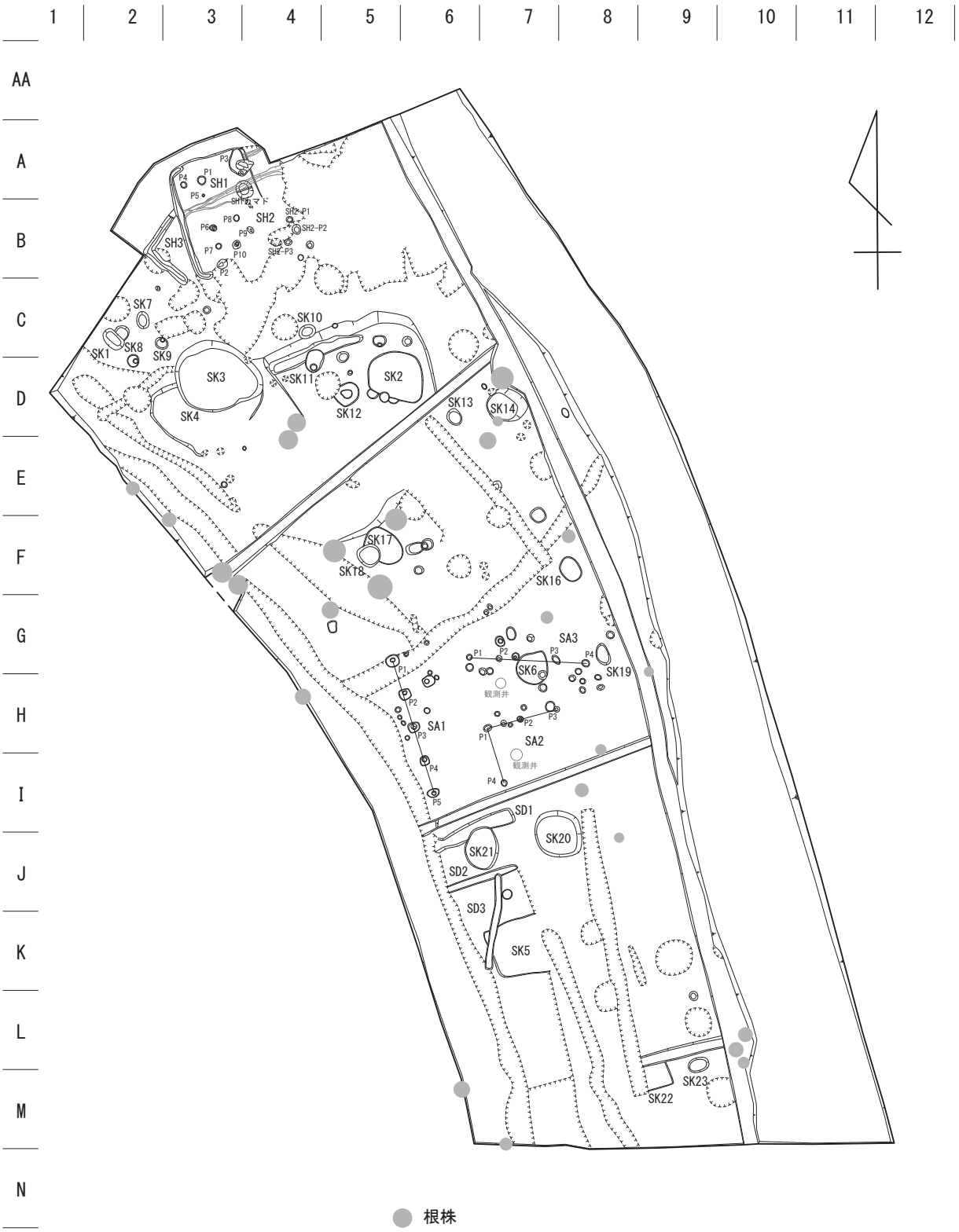
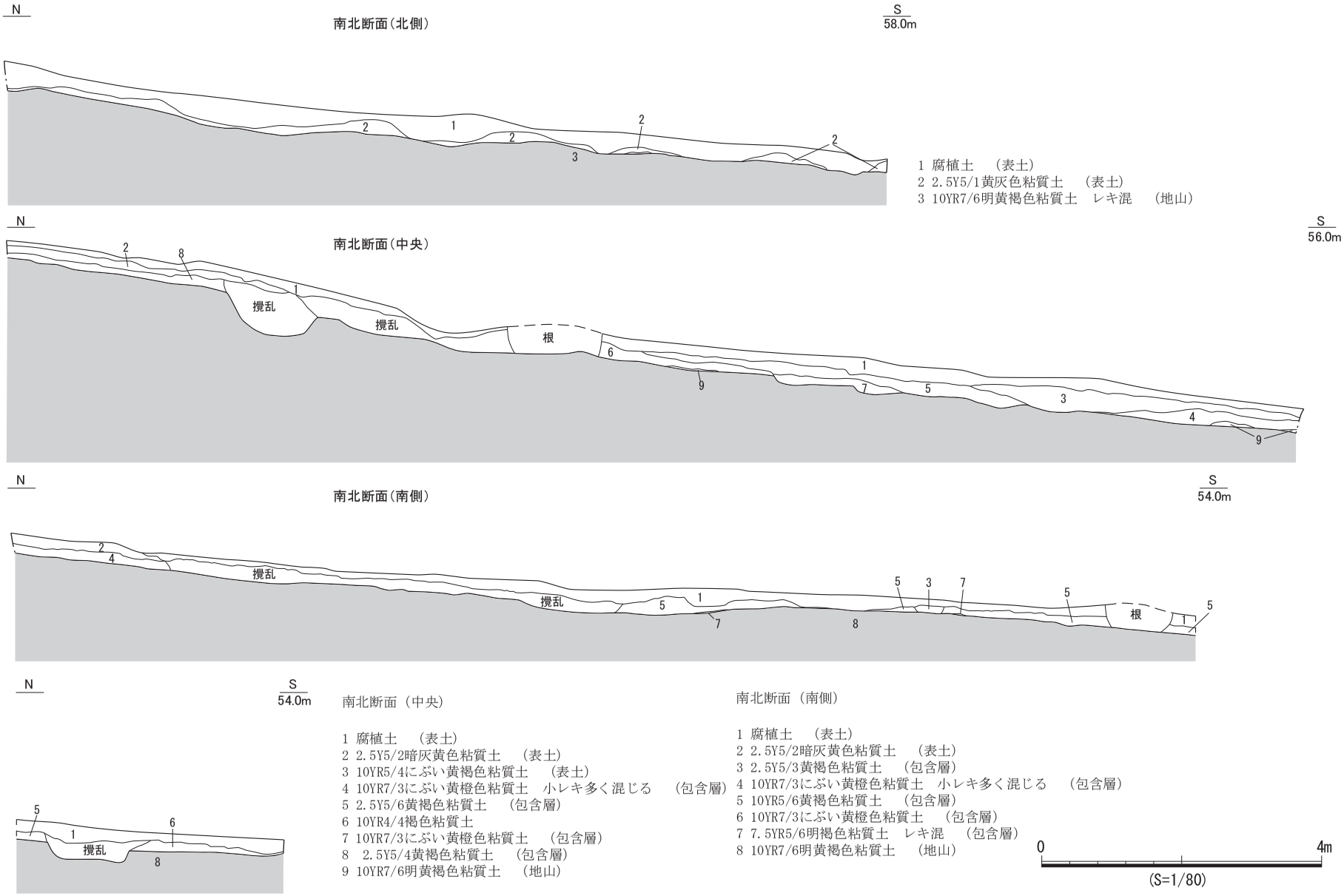

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
AA
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
SH1
SH2
SH3
SH2-P1
SH2-P2
SH2-P3
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SA1
SA2
SA3
SD1
SD2
SD3
観測井
根株
0
10m
(S=1/300)

図５　遺構全体図

図9　南北断面土層図



南北断面（中央）

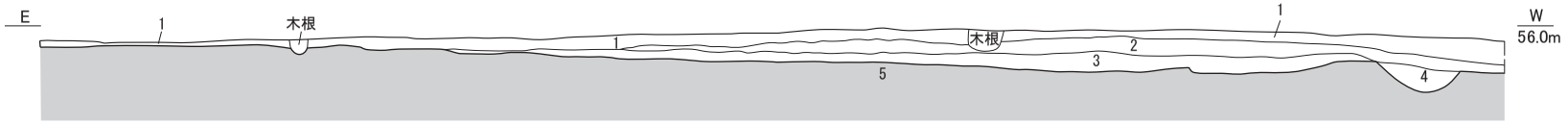
1 腐植土　（表土）
2 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　（表土）
3 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土　（表土）
4 10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　小レキ多く混じる　（包含層）
5 2.5Y5/6黄褐色粘質土　（包含層）
6 10YR4/4褐色粘質土
7 10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　（包含層）
8　2.5Y5/4黄褐色粘質土　（包含層）
9 10YR7/6明黄褐色粘質土　（地山）

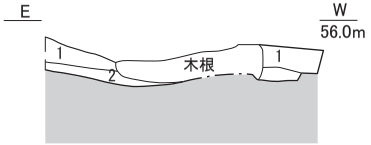
南北断面（南側）

1 腐植土　（表土）
2 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　（表土）
3 2.5Y5/3黄褐色粘質土　（包含層）
4 10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　小レキ多く混じる　（包含層）
5 10YR5/6黄褐色粘質土　（包含層）
6 10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　（包含層）
7 7.5YR5/6明褐色粘質土　レキ混　（包含層）
8 10YR7/6明黄褐色粘質土　（地山）

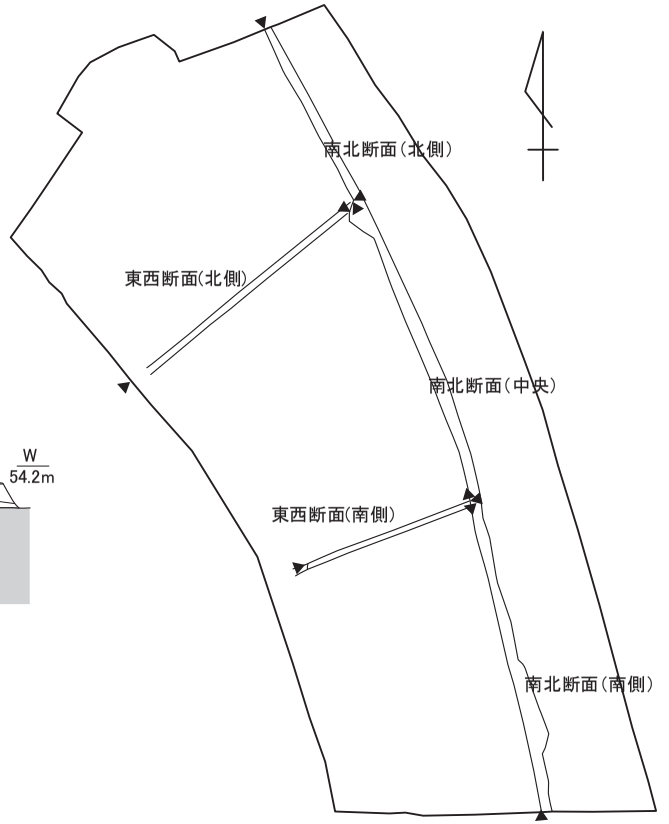
1 腐植土　（表土）
2 2.5Y5/1黄灰色粘質土　（表土）
3 10YR7/6明黄褐色粘質土　レキ混　（地山）

東西断面(北側)

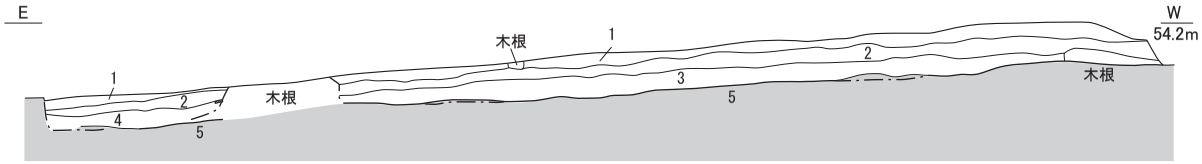




1　腐植土　（表土）
2　2.5Y5/1黄灰色粘質土　（表土）
3　10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　（包含層）
4　10YR6/2灰黄色粘質土　（SKかKA埋土）
5　10YR7/6明黄褐色粘質土　レキ混　（地山）



東西断面(南側)



1　表土
2　2.5Y5/1黄灰色粘質土　（表土）
3　10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　（包含層）
4　10YR7/3にぶい黄橙色粘質土　小レキ多く混じる　（包含層）
5　10YR7/6明黄褐色粘質土　レキ混　（地山）

0　4m
(S=1/80)

0　20m
(S=1/500)

図7　東西断面土層図

２．検出した遺構

検出した主な遺構は竪穴建物、柵列、土坑がある。遺構からの出土遺物が全体的に少ないため、詳細な時期が不明な遺構が多いが、奈良時代の遺構が多いと考えられる。検出した主要な各遺構について詳述する。

（１）竪穴建物

ＳＨ１（図８～10）

発掘調査区の北端、Ａ３・４、Ｂ３・４グリッドで検出した建物である。平面形は南北5.8m、東西4.4ｍの隅丸長方形となる。重複するＳＨ２より新しい。床面のほぼ全面で貼床と考えられるブロック土の硬化面を確認した。壁周溝は西側のみ確認し、東側は削平を受け残存しなかった。カマドは東壁の中央やや北寄りで確認した。検出時、カマドの袖部があったと考えられる北側と南側に焼土の硬化面がわずかに見られたが、袖部の痕跡らしき焼土の広がりが見られるのみで、粘土等のカマドに伴う構築材は一切残存しなかった。廃絶時、意図的にカマドに伴う施設は壊された可能性があろう。貼床面では大小の柱穴を確認した。このうち、建物のやや西寄りで検出した、Ｐ１とＰ２は主柱穴になると推定される。明確な柱痕跡は確認できなかった。Ｐ３は建物の北東隅で確認した土坑状の窪みである。検出時に遺構周辺には炭や焼土が薄く広がっていた。埋土は焼土や炭が混ざった浅黄色の粘質土で、須恵器の鉄鉢形鉢や土師器甕が出土した。

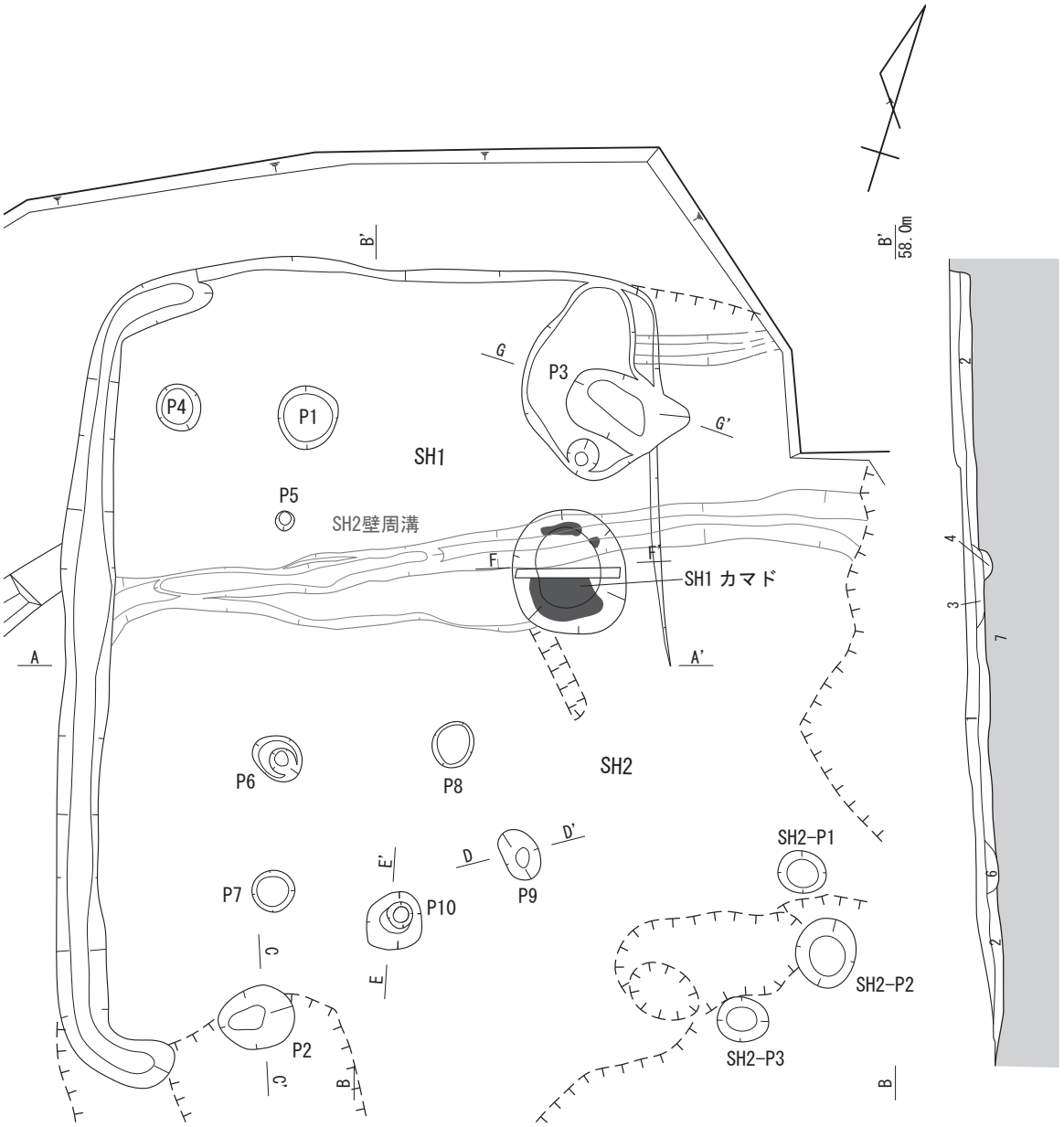
遺物の出土状況　遺物は北東部で多く出土した。いずれも、貼床直上から出土した遺物である。細片の破片資料が多く、接合できた遺物は少なかったが、カマド上面や周辺部で細かく割れた土師器甕の体部片が比較的集中して出土した。Ｐ３の周辺でも土師器片がまとまって出土した。建物の中央寄りでは、台石が正位の状態で出土した。この他、建築材の一部と推定される炭化材の小片が建物の北側で出土している。残存状況が悪く、具体的な部材の特定はできなかった。

ＳＨ２（図８・９）

ＳＨ１の南側で検出した。検出段階では、平面形が掴めなかったが、ＳＨ１のカマド下層で壁周溝を確認し、東側に延びることが分かったため、ＳＨ１に先行する建物であると判断した。検出した壁周溝から推定すると、東西5.5m以上、南北3.7m以上の隅丸長方形の平面形と推定される。壁周溝は北側と西側で確認した。西側の周溝についてはＳＨ１と大半が重複している。ＳＨ１との重複や攪乱等による削平もあり、カマド等の建物に伴う明確な付属施設は確認できなかった。建物の東側で小穴を数基検出したが、主柱穴など遺構に付属する明確な柱穴は確認できなかった。

ＳＨ３（図11）

ＳＨ１の西側で確認した。東西2.7m以上、南北３m以上の方形を呈する。壁周溝の一部を確認したのみで、大部分はＳＨ１と重複する。建物の主軸方向がＳＨ１、２と異なり、西にやや振っている。他の建物との重複により、カマドや主柱穴など付属する施設は確認できなかった。壁周溝から土師器の小片が出土したが、詳細な時期が分かる遺物はなかった。

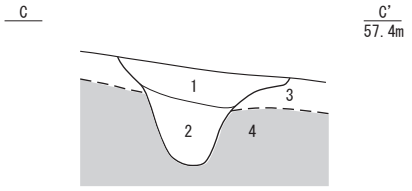


1　10YR7/3にぶい黄橙色粘質土
2　10YR7/3にぶい黄橙色粘質土に10YR8/2灰白色粘質土ブロック　（貼床）
3　10YR7/6明黄褐色粘質土　（壁周溝）
4　10YR7/6明黄褐色粘質土に10YR6/1褐灰色粘質土ブロック　（壁周溝）
5　10YR6/1褐灰色粘質土
6　2.5Y7/4浅黄色粘質土
7　10YR7/6明黄褐色粘質土　（地山）

0　2m
(S=1/50)

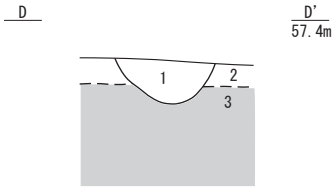
図8　ＳＨ１・２遺構図（１）

SH1-P2



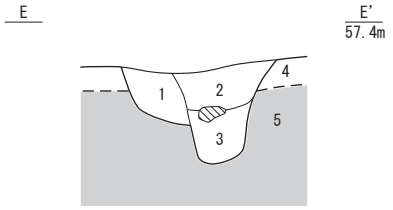
1　10YR6/2灰黄褐色粘質土
2　10YR6/4にぶい黄橙色粘質土
3　7.5YR6/3にぶい橙色粘質土に
　7.5YR7/2灰黄色粘質土ブロック
　(SHの貼床)
4　10YR7/6明黄褐色粘質土（地山）

SH1-P9



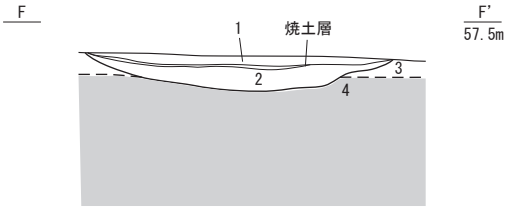
1　7.5YR6/2灰褐色粘質土
2　7.5YR6/3にぶい橙色粘質土に
　2.5YR7/2灰黄色粘質土ブロック
　(SHの貼床)
3　10YR7/6明黄褐色粘質土（地山）

SH1-P10



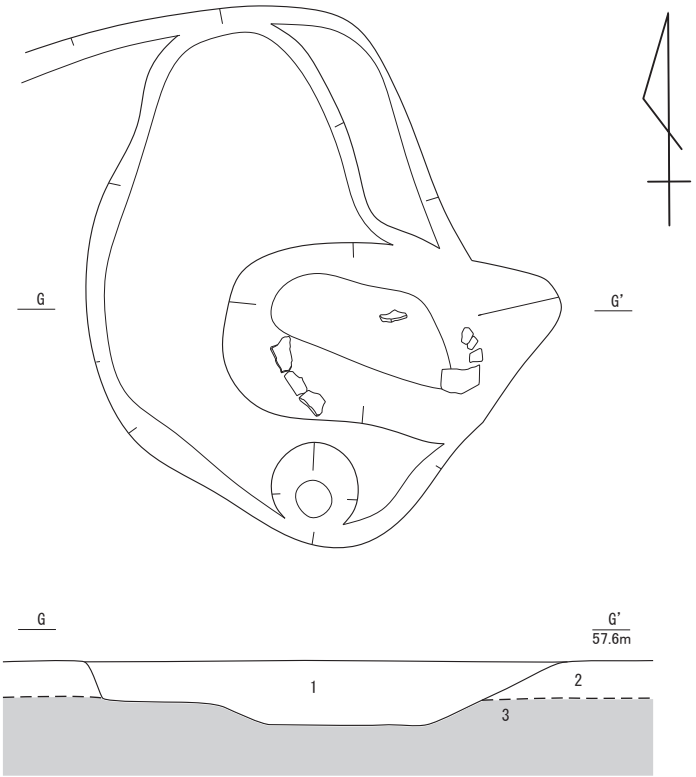
1　10YR8/1灰白色粘質土に7.5YR6/2灰褐色粘質土ブロック
2　7.5YR6/2灰褐色粘質土に10YR8/1灰白色粘質土ブロック
3　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
4　7.5YR6/3にぶい橙色粘質土に
　7.5YR7/2灰黄色粘質土ブロック（SHの貼床）
5　10YR7/6明黄褐色粘質土（地山）

SH1カマド

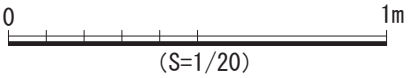


1　2.5Y6/4にぶい黄色粘質土
2　2.5Y5/3黄褐色粘質土　地山土粒含
3　7.5YR6/3にぶい橙色粘質土に
　7.5YR7/2灰黄色粘質土ブロック（SHの貼床）
4　10YR7/6明黄褐色粘質土（地山）

SH1-P3



1　2.5Y7/4浅黄色粘質土に焼土、炭混じる
2　7.5YR6/3にぶい橙色粘質土に
　7.5YR7/2灰黄色粘質土ブロック（SHの貼床）
3　10YR7/6明黄褐色粘質土（地山）



(S=1/20)

図９　ＳＨ１・２遺構図（２）

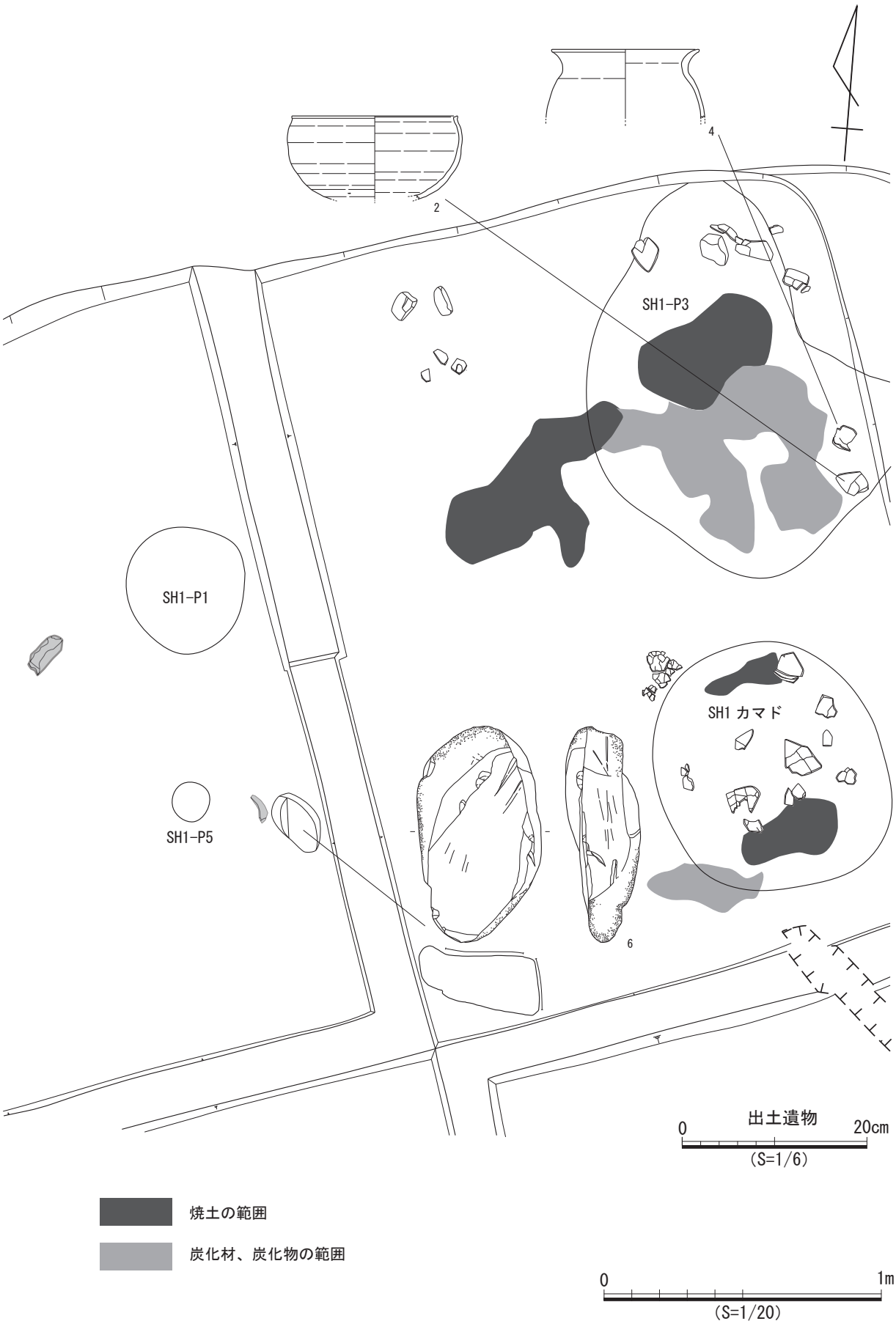


図10　ＳＨ１遺物出土状況図

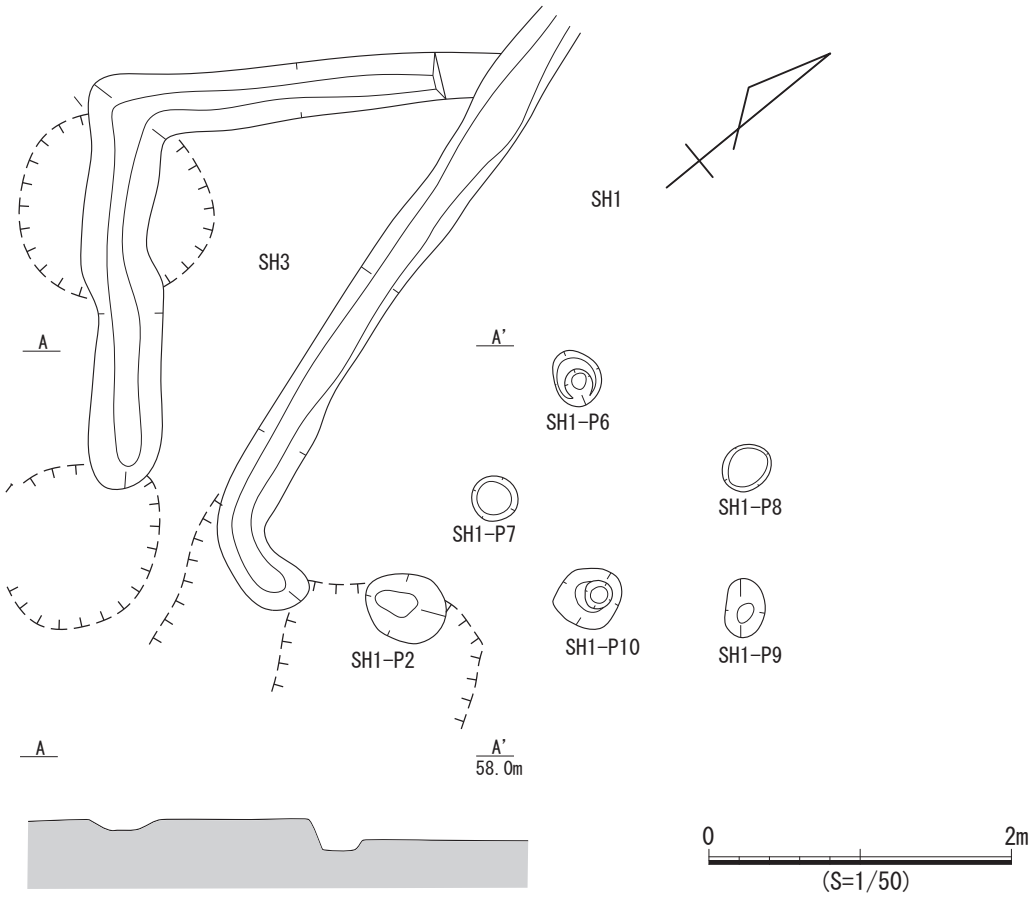


図11　ＳＨ３遺構図

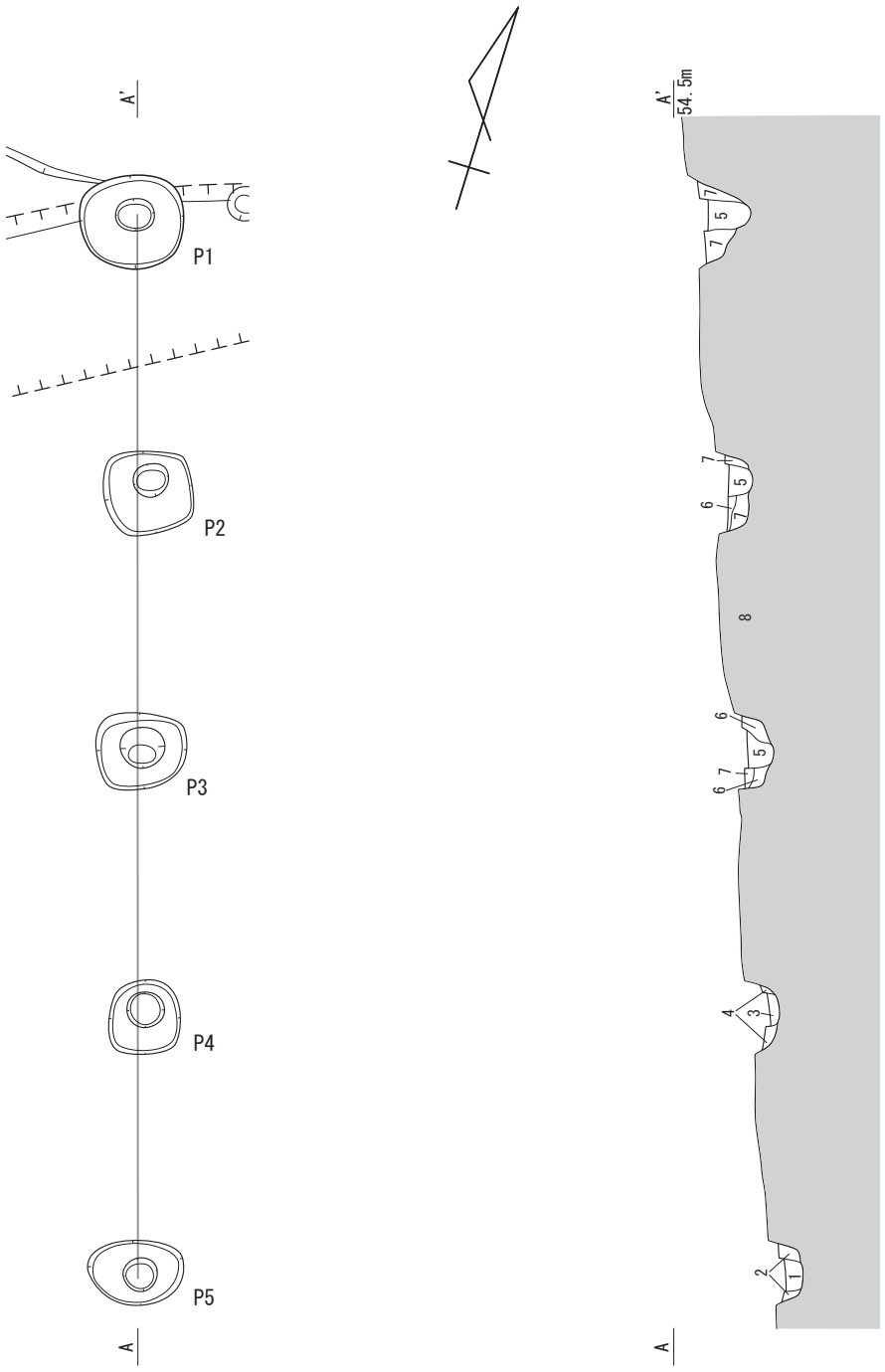
（２）柵　　列

ＳＡ１（図12）

発掘調査区の中央付近、Ｈ５・６、Ｉ６グリッドで検出した柵列である。当初、南北方向の掘立柱建物であったと想定していたが、南北に延びる梁行方向の柱穴や東側の桁行方向の柱列が確認できなかったため、南北方向に延びる柵列と判断した。柵列の規模は、南北４間で長さが7.2m、柱間は芯心で1.8mの等間となる。柱掘形は一辺0.4～0.5mの略方形を呈している。すべての堀形で柱痕跡を確認できた。柵列の主軸方向は北から西に約16°振っている。遺物はＰ１から土師器の小片が出土した。

ＳＡ２（図13）

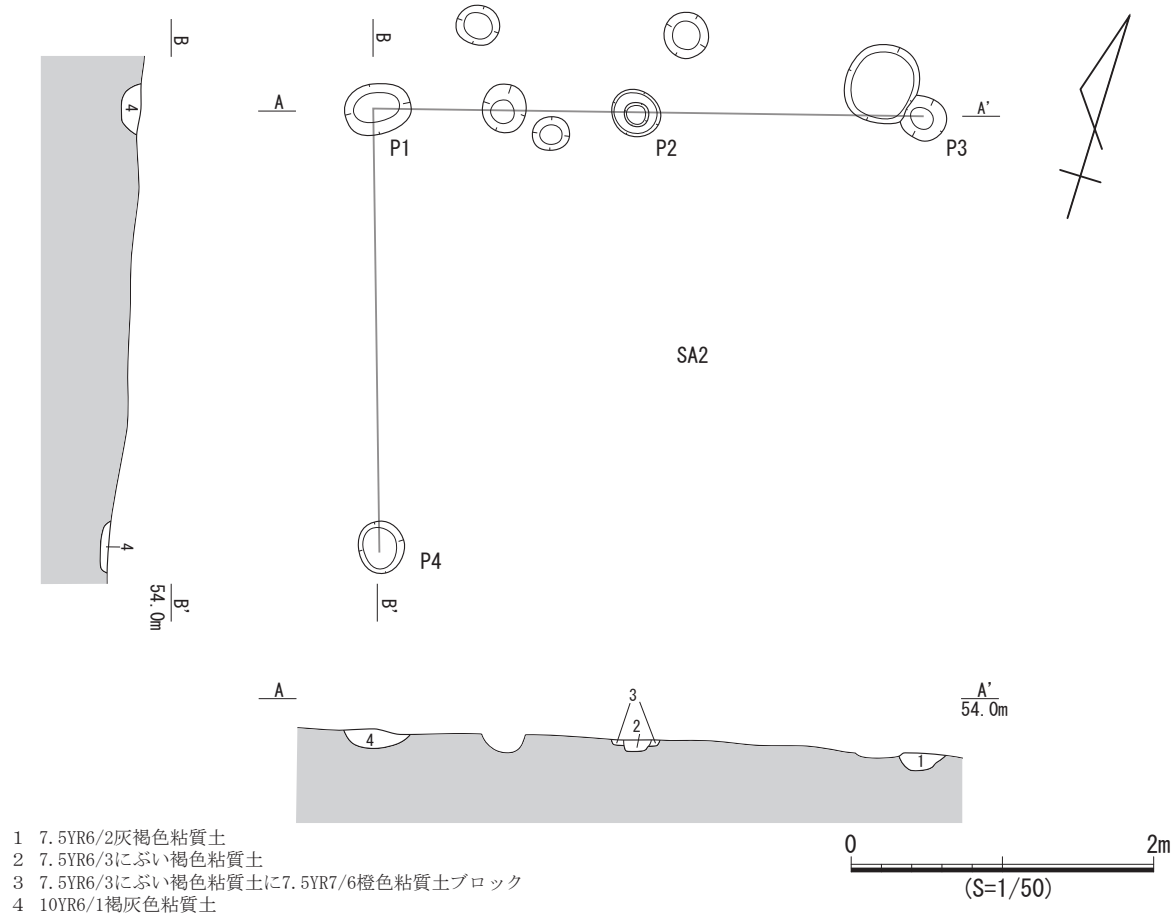
Ｈ７、Ｉ７グリッドで検出した柵列である。掘立柱建物の可能性も想定したが、東側の桁行方向の柱列を欠くため、柵列と判断した。規模は、東西２間以上、南北１間以上である。柱掘形が浅く、Ｐ２を除いて柱痕跡は確認できなかった。柱間は東西が1.8mの等間、南北が2.4mと推定される。柱掘形は、直径0.3m～0.5mの円形もしくは長楕円形を呈している。柵列の主軸方向は東西方向の柱列で南に約15°振っている。柱掘形から遺物がないため、詳細な時期は不明である。



1　10YR5/4にぶい黄褐色粘質土　（柱痕）
2　10YR5/6黄褐色粘質土
3　10YR5/3にぶい黄褐色粘質土　レキ混
4　10YR6/6明黄褐色粘質土　レキ混
5　10YR6/6明黄褐色粘質土　（柱痕）
6　10YR6/6明黄褐色粘質土に10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック
7　10YR6/6明黄褐色粘質土　小レキ混
8　10YR7/6明黄褐色粘質土　レキ混　（地山）

0　2m
(S=1/50)

図12　ＳＡ１遺構図



1　7.5YR6/2灰褐色粘質土
2　7.5YR6/3にぶい褐色粘質土
3　7.5YR6/3にぶい褐色粘質土に7.5YR7/6橙色粘質土ブロック
4　10YR6/1褐灰色粘質土

図13　ＳＡ２遺構図

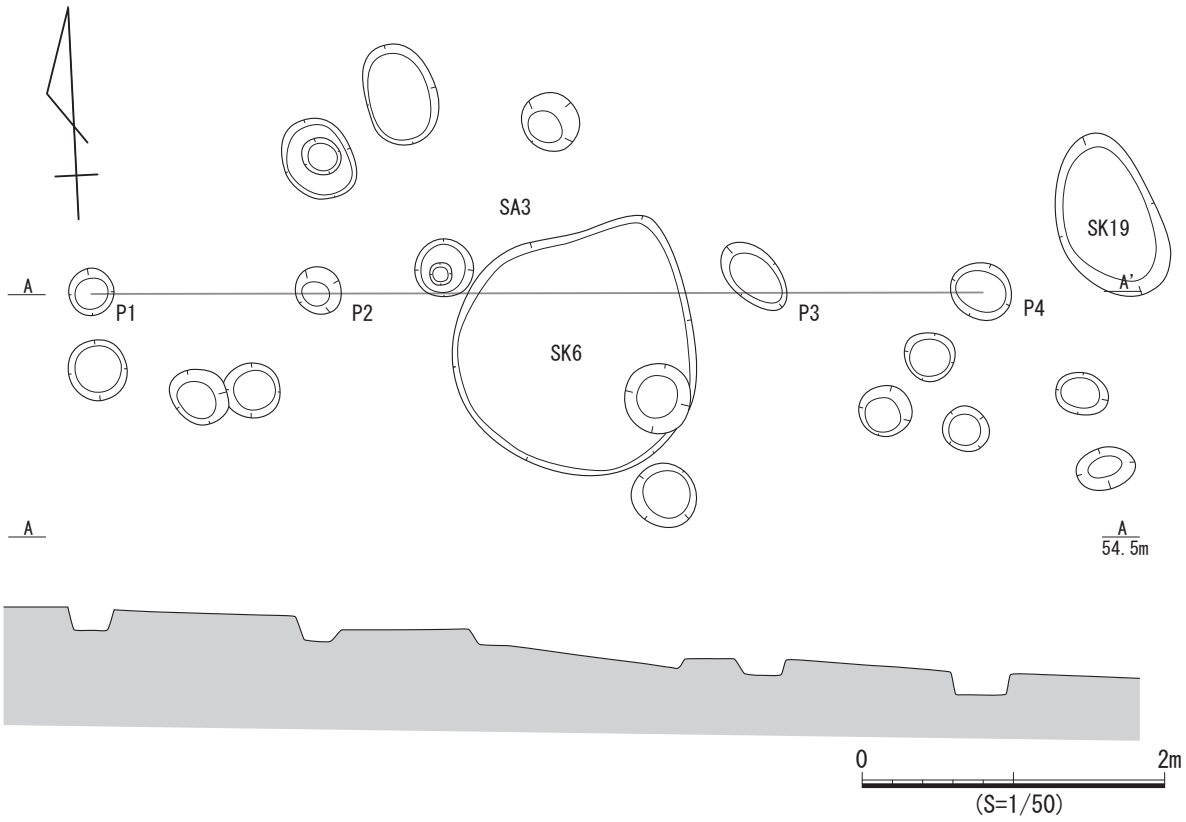


図14　ＳＡ３遺構図

ＳＡ３（図14）

Ｇ６～８、Ｈ６～８グリッドで検出した柵列である。ＳＫ６に切られるため、構成する柱穴を欠くが、東西方向に延びる柵列と考えられる。規模は、東西４間以上で長さが６ｍ以上である。柱痕跡は確認できなかったが、柱間は1.5mの等間と推定される。柱掘形は、直径0.3m～0.5mの円形もしくは楕円形である。全体的に掘形が浅く、柱痕跡は検出できなかった。柵列の主軸方向は南に約３°振っている。柱掘形から遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。

（３）土　　坑

ＳＫ１（図15）

発掘調査区の北西のＣ２グリッドで検出した土坑である。南北1.2m、東西1.3m、深さ0.8mの長楕円形を呈する。断面の形状は底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は大きく２層に分層できる。上層は赤褐色土で、下層は地山である明黄褐色土がブロック状に混じる。遺構内から出土遺物はなかった。

ＳＫ２（図15）

Ｄ５・６グリッドで検出した土坑である。南北2.4m、東西2.8m、深さ0.2mの不整形な楕円形を呈する。埋土は黄橙色粘質土で、ＳＫ３やＳＫ４の土層に近い。明確な出土遺物はなかった。

ＳＫ３（図15）

Ｃ３、Ｄ３・４グリッドで検出した土坑である。南北3.6m、東西4.2m、深さ0.4mの長楕円形を呈する。埋土は大きく２層に分層できる。上層はやや締まりがない土で、短期間に一気に埋まったと考えられる。埋土から、須恵器杯身、杯蓋、甕や砥石など奈良時代の遺物が出土した。

ＳＫ４（図16）

ＳＫ３と重複して検出した土坑である。遺構の南側は後世の削平を受けほとんど残っていない。ＳＫ３に切られるため、平面形は明確でないが、南北約４ｍ、東西4.7m以上、深さ0.2mの不整形な楕円形を呈するものと考えられる。埋土は、にぶい黄橙色粘質土である。土坑の底近くで、自然石に混じって土師器甕の小片が出土した。

ＳＫ５（図16）

Ｋ７グリッドで検出した土坑である。南北2.9m、東西2.8m、深さ0.2mの方形を呈する。東側は耕作時の溝等により削平され、残存しない。竪穴建物の可能性も想定したが、壁周溝等の施設は一切確認できなかった。遺構埋土は地山の土質と近い、橙色粘質土であった。出土遺物は、須恵器ハソウの小片や土師器片があるが、いずれも細片で図示できる遺物はなかった。

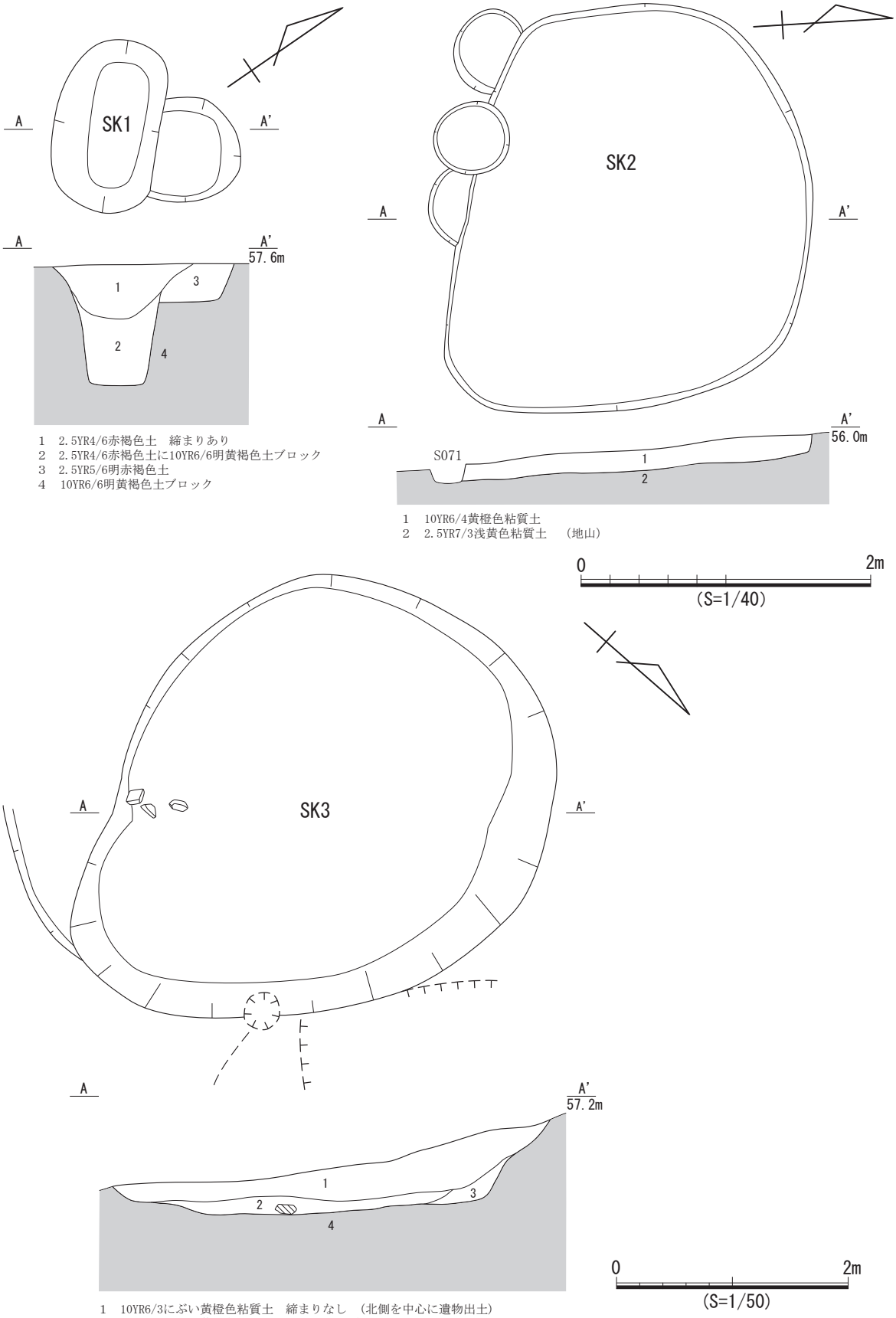

SK1
A
A'
57.6m
1
2
3
4
1　2.5YR4/6赤褐色土　締まりあり
2　2.5YR4/6赤褐色土に10YR6/6明黄褐色土ブロック
3　2.5YR5/6明赤褐色土
4　10YR6/6明黄褐色土ブロック
SK2
A
A'
56.0m
S071
1
2
1　10YR6/4黄橙色粘質土
2　2.5YR7/3浅黄色粘質土　（地山）
0
2m
(S=1/40)
SK3
A
A'
57.2m
1
2
3
4
1　10YR6/3にぶい黄橙色粘質土　締まりなし　（北側を中心に遺物出土）
2　10YR6/3にぶい黄橙色粘質土に10YR7/1灰白色粘質土混じる　締まりあり　粘性強
3　10YR6/6明黄褐色粘質土に10YR7/1灰白色粘質土ブロック
4　2.5YR7/3浅黄色粘質土　（地山）
0
2m
(S=1/50)

図15　ＳＫ１～３遺構図

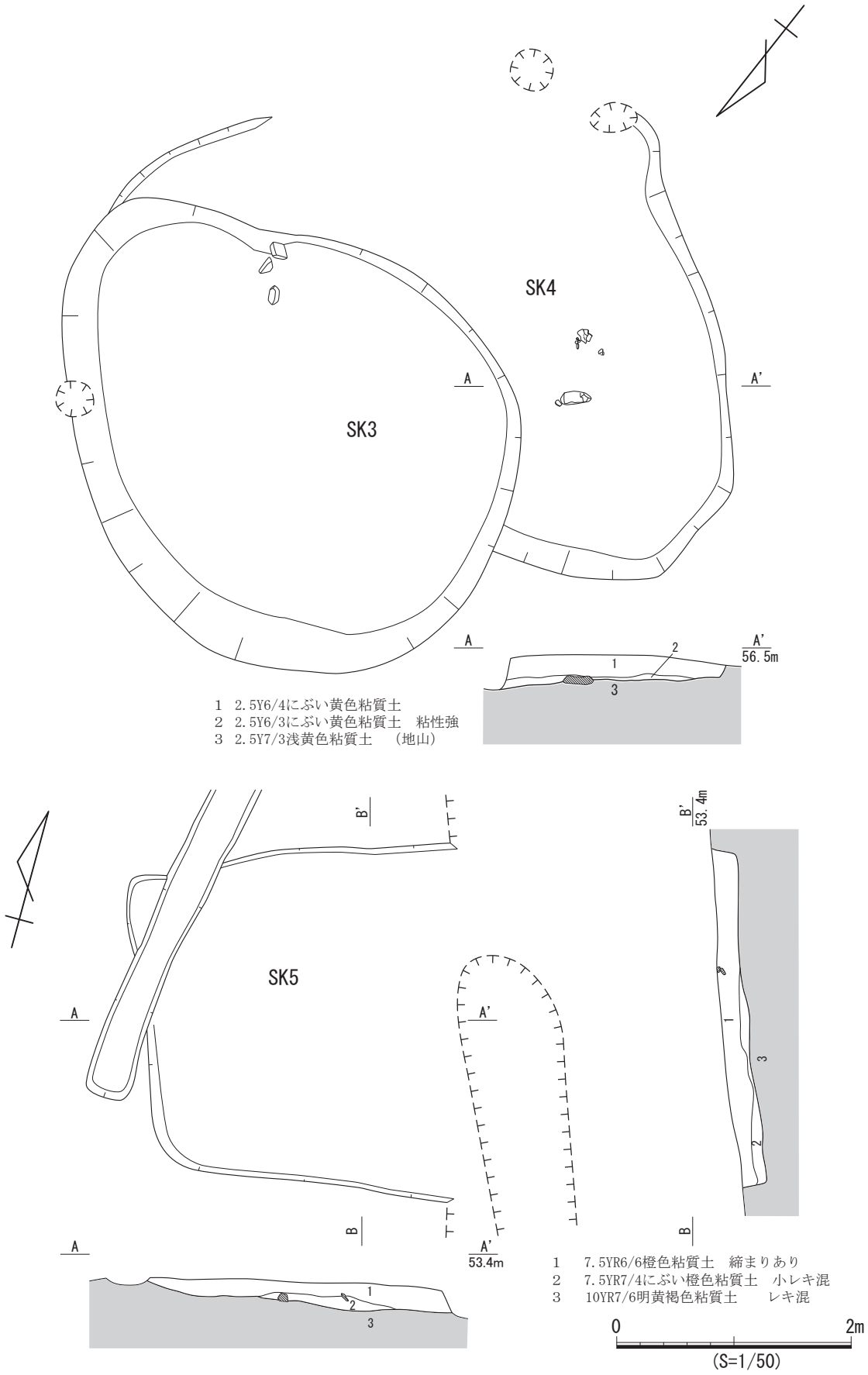

SK4
SK3
A
A'
56.5m
1 2.5Y6/4にぶい黄色粘質土
2 2.5Y6/3にぶい黄色粘質土 粘性強
3 2.5Y7/3浅黄色粘質土 (地山)
SK5
B
B'
53.4m
1 7.5YR6/6橙色粘質土 締まりあり
2 7.5YR7/4にぶい橙色粘質土 小レキ混
3 10YR7/6明黄褐色粘質土 レキ混
0
2m
(S=1/50)

図16 ＳＫ４・５遺構図

第４章　出土した遺物

今回の発掘調査では、コンテナケースで６箱ほどの出土遺物があった。奈良時代を中心とした須恵器や土師器が大半を占める。包含層からの遺物がほとんどで、遺構からの出土遺物は全体的に少なかった。遺構出土遺物、包含層等の出土遺物の順で記述する。個別遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。須恵器の時期については、尾野氏の編年を参考とした[(1)]。

（１）遺構遺物

ＳＨ１ 出土遺物（１～６）

床面遺物を中心に図示した。須恵器（１～３）のうち、１は脚部のみであるが、高杯になろう。使用により脚端部が摩耗する。２は鉄鉢形の鉢である。丸底の形状で、底部外面はヘラ削り調整される。猿投窯のI―17～I―25号窯式頃に相当しよう。３は甕である。内面の当て具痕をすり消している。４は土師器の甕である。口縁部は強く外反する。被熱のため器面の残りが悪いが、内外面にハケ調整は見られない。５と６は石製品で、いずれも砂岩製である。５は砥石で、角を丸く面取り状に加工し、２面に研面が見られる。６は、川原石の一面に平坦な部分があり、台石と考えられる。２面に使用痕が見られる。

ＳＫ３ 出土遺物（７～10）

４点を図示した。７は須恵器の杯蓋で、口縁部は「く」の字に屈折する。猿投窯のI-25窯式頃のものであろう。８は有台杯身である。色調は橙色を呈し、軟質焼成である。胎土に石英粒が多く混じる。９は甕である。外面に叩き痕、内面に同心円の当て具痕を残す。胎土が明瞭に異なり、美濃須衛窯の製品の可能性がある。10は凝灰岩製の砥石である。正面と側面に明瞭な砥痕が見られる。

ＳＫ４ 出土遺物（11）

須恵器の有台杯身である。胎土に黒色粒が多く混じり、底部内面に焼成後に記されたヘラ記号が見られる。猿投窯のI―25号窯式頃に相当しよう。

（２）試掘遺物

試掘調査時の遺物を図示した。13は須恵器の杯蓋で、試掘坑Ｔ１から出土した。12と14は、発掘調査区の範囲外にある試掘坑Ｔ６から出土した。12は底部全体が摩滅し、不明瞭だが墨痕らしきものが認められる。杯身を転用した硯の可能性がある。14は須恵器の提瓶である。把手が付き、外面に平行叩きが見られる。猿投窯のI―17～I―25号窯式頃に相当しよう。

（3）包含層遺物

須恵器・灰釉陶器（15〜31） 15〜19には7世紀代の入るものが見られる。15は摘みを欠くが、かえりをもつ杯蓋である。16は杯身である。無台の杯身（17〜19）のうち、17は胎土に石英粒が混じる。19は軟質焼成で、底部は未調整となっている。胎土の特徴から美濃須衛窯の製品の可能性がある。

20〜30は大半が8世紀以降のもので、全体的に猿投窯の製品が多い。20と21は杯蓋である。20は摘みが扁平で口縁部の折り返しを丸く収める。21は摘みが小さく、口縁端部をくの字に屈折させる。22〜25は有台の杯身である。23は底部外面に「T」字状のヘラ記号があり、不明瞭だが墨書らしき痕跡が認められる。猿投窯のI―25号窯式のものであろう。24は底部端近くに台形状の低い高台が付く。胎土が明確に異なり、美濃須衛窯の製品の可能性がある。26は口縁部が直線的に立ち上げる箱形の無台の杯身である。色調は橙色を呈し、やや軟質焼成である。底部内面に焼成後のヘラ記号が見られる。猿投窯のNN―32号窯式のものであろう。27は大型の杯身で、口縁端部の下に沈線上の段をもつ。28は深手の器形となる杯で、体部の下半部にヘラ削り調整が施される。29は口縁部の小片のみであるが、盤である。30は平瓶で、口縁部が直立して立ち上がり、外面に自然釉薬が付着する。猿投窯のI―17号窯式に相当しよう。31は灰釉陶器の碗である。

土師器他（32〜34） 小破片が多く、全体的に実測できた個体は少ない。32と33は口縁部の残片からの判断し、長胴甕とみられる。いずれも内外面をハケ調整する。33は端部を上方に摘まみ上げ、口縁部外面に明瞭な面をもつ。34は、いわゆる移動式カマドである。右側面の破片資料のみであるが、掛口から把手部にかけての部分であると推定する。掛口の推定径は23㎝程である。

石器（35・36） いずれもチャート製の石器である。35は無茎の石鏃で、基部の抉りは丸く深い。側縁部の形状は比較的は直線的である。36は剥片で、縁辺部に連続する微細な剥離痕が見られる。

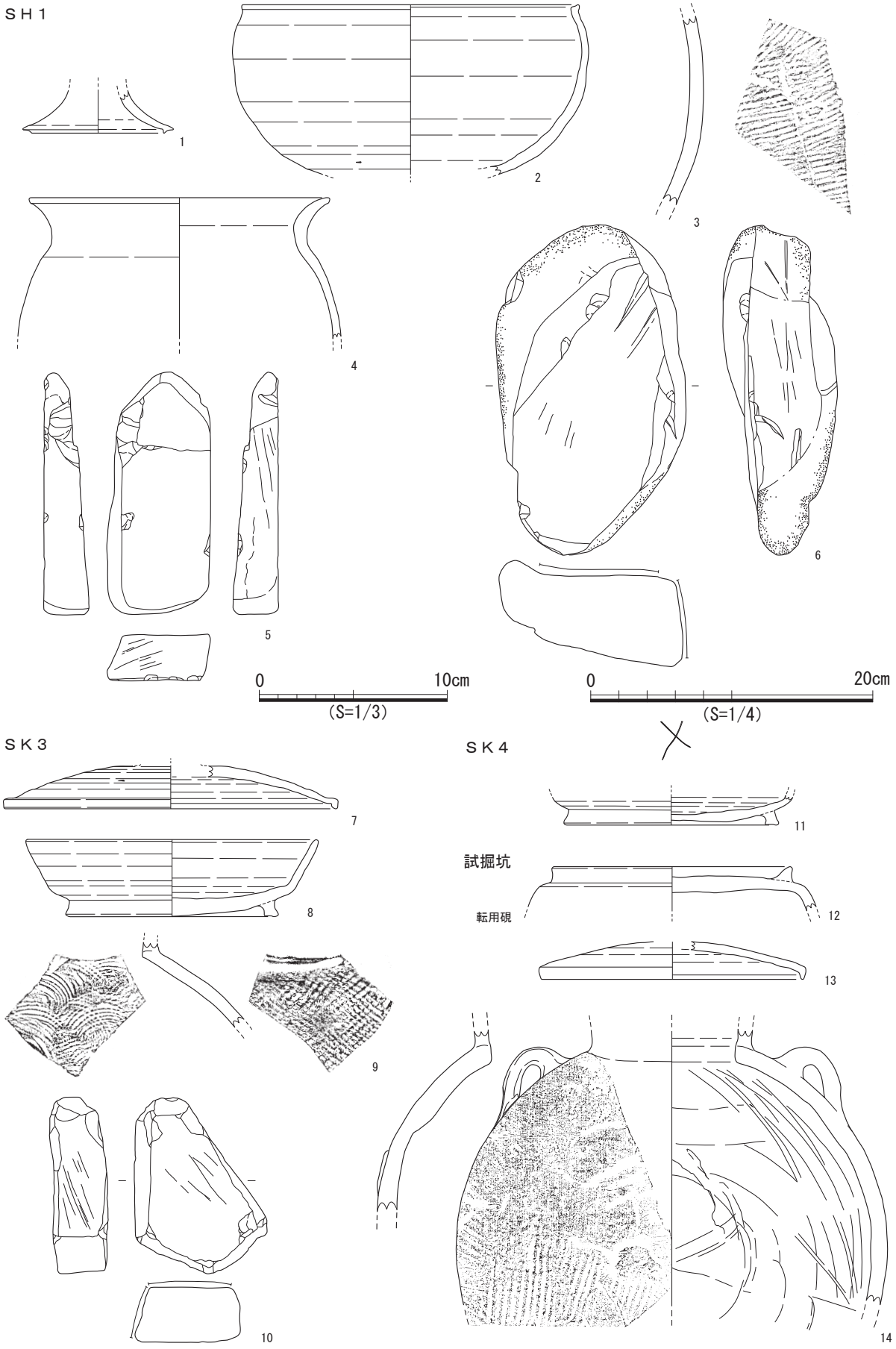


図17　出土遺物実測図（１）

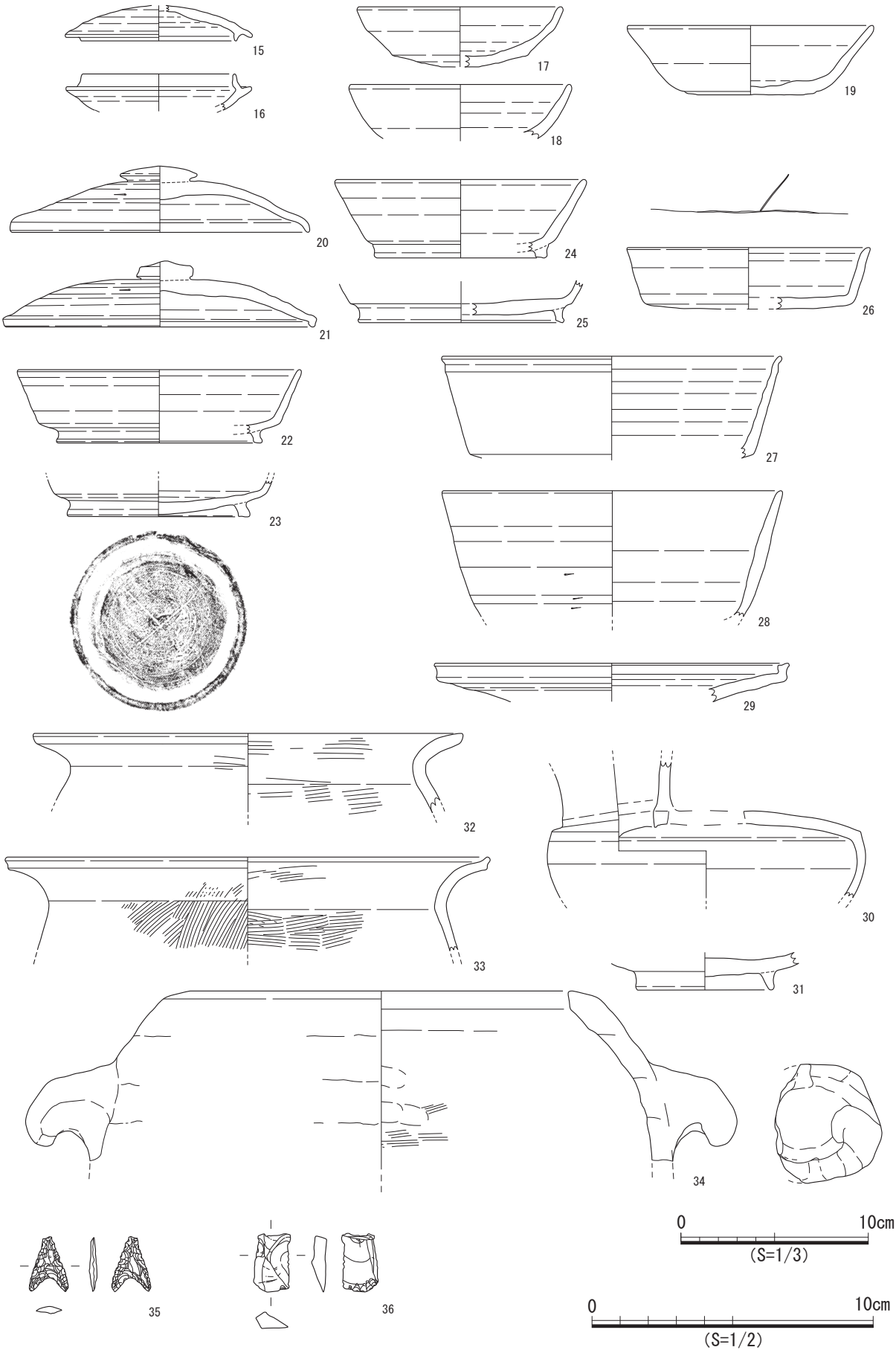


図18　出土遺物実測図（２）

表２　土器観察表（１）

報告番号	出土遺構	グリッド	器種	口径 底径 器高	胎土	焼成	色調	産地	成形・調整・施文・施釉等
1	SH１	A３・B３	須恵器 高杯	口径― 底径8.0 器高（2.3～）	密	良好	内外面：灰白色（N７/０）	猿投	内外面：回転ナデ、自然釉付着
2	SH１―P３	A３・B３	須恵器 鉄鉢形鉢	口径（18.0） 底径― 器高（9.0～）	密	良好	内外面：灰白色（N７/０）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ケズリ
3	SH１	B３	須恵器甕	口径― 底径― 器高―	密	良好	内面：灰白色（N７/０） 外面：灰色（N４/０）	猿投	内面：同心円当具痕のちナデ 外面：叩き
4	SH１	A３	土師器甕	口径16.0 底径― 器高　―	密	不良	内外面：にぶい橙色 （7.5YR７/４）	不明	内面：ヨコナデ、ナデ 外面：摩耗のため調整不明
7	SK１	D３・４	須恵器 杯蓋	口径（17.8） 底径― 器高（2.3～）	密	良好	内外面：灰白色（N７/０）	猿投	内面：回転ナデ 外面：摘み貼付けナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ
8	SK１	D３	須恵器 有台杯身	口径15.6 底径11.3 器高4.1	密	やや不良	内面：灰黄褐色（10YR６/２） 外面：にぶい橙色 （7.5YR７/４）	不明	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ケズリ、高台貼付けナデ
9	SK１	D３・４	須恵器甕	口径― 底径― 器高―	密	良好	内面：灰色（N６/０） 外面：灰白色（N７/０）	美濃 須衛	内面：回転ナデ、同心円当て具痕 外面：回転ナデのち格子目叩き
11	SK２	D２、D3,4	須恵器 有台杯身	口径― 底径11.5 器高（1.6～）	密	良好	内外面：灰白色（５Y７/１）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ケズリ、高台貼付けナデ 底部：外面ヘラ記号
12	試掘坑T６		須恵器 転用硯か	口径12.8 底径― 器高（2.3～）	密	良好	内面：灰白色（N７/０） 外面：灰色（N６/０）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ、高台貼付けナデ
13	試掘坑T１		須恵器 杯蓋	口径（14.0） 底径― 器高（2.0～）	密	良好	内外面：灰色（N５/）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ
14	試掘坑T６		須恵器 堤瓶	頸径（9.1） 底径― 器高（14.5～）	密	良好	内面：灰白色（N７/０） 外面：灰色（５Y５/１）～ 灰オリーブ色（7.5Y４/２）	猿投	内面：回転ナデ、回転ナデのち叩き把手貼付けナデ 外面：回転ナデのちナデ
15	包含層	H８	須恵器 杯蓋	口径（8.3） 底径― 器高2.0	密	良好	内外面：灰白色（2.5Y７/１）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ 一部自然釉付着
16	包含層	K6,7	須恵器 杯身	口径（10.8） 底径― 器高3.2	やや密	良好	内面：灰白色（7.5Y７/１） 外面：灰色（7.5Y６/１）	不明	内面：回転ナデ 外面：ヘラ切未調整
17	包含層	F７	須恵器 杯身	口径（8.2） 底径― 器高―	密	良好	内外面：灰黄色（2.5Y６/２）	猿投	内外面：回転ナデ
18	包含層	J６・７	須恵器 杯身	口径（12.0） 底径― 器高（2.9～）	密	良好	内面：灰白色（５Y７/１） 外面：灰黄色（2.5Y６/２）	不明	内外面：回転ナデ
19	包含層	―	須恵器 杯身	口径（13.0） 底径（5.6） 器高3.7	やや密	不良	内外面：灰白色（2.5Y７/１）	美濃 須衛か	内外面：回転ナデ 外面：ヘラ切未調整
20	包含層	―	須恵器 杯蓋	口径16.0 底径― 器高3.5	密	良好	内外面：灰白色（N７/０）	不明	内面：回転ナデ 外面：摘み貼付けナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ
21	包含層	F７	須恵器 杯蓋	口径16.8 底径― 器高3.5	密	良好	内外面：灰色（N６/０）	不明	内面：回転ナデ 外面：摘み貼付けナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ
22	表土	L７	須恵器 有台杯身	口径（15.2） 底径（11.0） 器高3.9	密	良好	内外面：灰白色（５Y７/１）	猿投	内面：回転ナデ 外面：高台貼付けナデ
23	包含層	J８	須恵器 有台杯身	口径― 底径9.8 器高（1.9～）	密	良好	内外面：灰白色（N７/０）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ、高台貼付けナデ底部：外面ヘラ記号
24	包含層	J８	須恵器 有台杯	口径（13.4） 底径（9.2） 器高4.2	密	やや良好	内面：灰白色（2.5Y８/２） 外面：灰白色（N７/０）	美濃 須衛か	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ、高台貼付けナデ
25	包含層	I８	須恵器 杯蓋	口径― 底径（10.8） 器高（2.0～）	密	良好	内外面：灰黄色（2.5Y６/２）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ケズリ、高台貼付けナデ
26	包含層	F７	須恵器 無台杯身	口径（13.0） 底径（11.0） 器高3.3	密	不良	内面：浅黄橙色（7.5YR８/４） 外面：にぶい黄橙色 （10YR７/２）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ケズリ 底部：内面ヘラ記号

表３　土器観察表（２）

報告番号	出土遺構	グリッド	器種	口径 底径 器高	胎土	焼成	色調	産地	成形・調整・施文・施釉等
27	包含層	Ｈ８	須恵器 杯身	口径（18.2） 底径— 器高（5.4～）	密	良好	内面：赤橙色（10R６／６） 外面：灰色（7.5Y６／１）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ケズリ
28	包含層	Ｈ８	須恵器 杯身	口径（18.0） 底径— 器高（6.7～）	密	良好	内外面：灰色（Ｎ５／０）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ
29	包含層	Ｃ４・Ｄ４	須恵器盤	口径（19.0） 底径— 器高—	密	良好	内外面：灰色（7.5Y６／１）	猿投	内外面：回転ナデ
30	包含層	Ｌ７	須恵器 平瓶	口径— 最大径17.0 底径— 器高（7.3～）	密	良好	内面：灰色（Ｎ６／０）外面： 灰白色（Ｎ７／０）	猿投	内外面：回転ナデ、貼付けナデ
31	包含層	Ｄ・Ｅ６、Ｅ７	灰釉陶器 碗	口径— 底径7.2 器高（1.9～）	密	良好	内外面：灰白色（2.5Y８／１）	猿投	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、高台貼付けナデ
32	包含層	Ｈ８	土師器甕	口径（23.0） 底径— 器高—	密	良好	内外面:浅黄橙色(10YR８／４）	不明	内外面：ヨコナデ、ハケ
33	包含層	Ｋ６・７	土師器甕	口径（26.0） 底径— 器高—	密	良好	内面：灰白色（2.5Y８／１） 外面：浅黄橙色（10YR８／３）	不明	内外面：ヨコナデ、ハケのちナデ
34	包含層	Ｈ８	土製品 竈形土器	口径（20.9） 底径— 器高—	密	良好	内外面:浅黄橙色(10YR８／４）	不明	内面：ケズリのちナデ、ナデ 外面：ナデ、貼付けナデ（把手）

表４　石器、石製品観察表

報告番号	出土遺構	グリッド	器種	石材	大きさ（cm）	備考
5	SH１	Ａ３、B3,4	砥石	砂石	長さ：12.9 幅：5.5 厚さ：2.4	
6	SH１	Ａ３	台石	砂石	長さ：23.2 幅：12.5 厚さ：6.2	
10	SK２	D3,4	砥石	凝灰岩	長さ：8.6　幅：5.7　厚さ：2.9	
35	包含層	D3,4	石鏃	チャート	長さ：1.9 幅：1.4 厚さ：0.8	
36	包含層	D3,4	剥片	チャート	長さ：2.1 幅：1.8 厚さ：0.6	

第５章　まとめ

今回の発掘調査では、竪穴建物や柵列、土坑等を検出した。耕作時の攪乱の影響もあり、残存状況が悪く時期が確定できるものは少ないが、概ね奈良時代を中心とした遺構である。全体的に遺構密度は希薄で、竪穴建物や柵列等が各所に点在した状況であった。遺物は少ないが、出土した須恵器を見る限り、８世紀中頃までのものが多い。平成10年に実施した試掘調査では、正確な位置関係は不明だが、試掘坑Ｔ６の南側付近で掘立柱建物の可能性がある柱列や土坑等が検出され、８世紀代を中心とした須恵器が出土している。こうした状況から、尾根の平坦部一帯に居住域が広がっていたと考えられる。

次に、谷を挟んで東側に位置する南小山廃寺の様相を見てみたい。南小山廃寺は、昭和60年に市道建設に関連して発掘調査が実施されている。出土した軒丸瓦などから、７世紀後半頃に創建されたと推定される。調査では瓦敷遺構や溝などの遺構や平安時代の掘立柱建物が確認され、寺院に付属した施設であったとされている(2)。創建された時期の寺院施設の状況が不明確であるが、寺院自体は11世紀頃まで存続していたと可能性がある(3)。遺構の状況を見ると、南北を縦断する区画溝と方向を揃えた建物や柱列らしきものが複数確認でき、尾根の南側の平坦部を中心に古代の建物群が広がっていると考えられる。ただし、令和３年度に実施した調査の状況を見る限り、尾根の北側では明確な遺構の広がりは見られない。

発掘調査を実施した中ノ谷遺跡は、南小山廃寺と少し離れた尾根に位置することもあり、遺構面から寺院との直接的な関りは見られなかった。しかし、転用硯や須恵器の鉄鉢形の鉢、移動式カマド(4)など通常の集落からあまり出土しない遺物が認められ、遺構の時期は寺院が存続する時期ほぼ一致している。こうした点を積極的に評価すると、寺院に関わる集団の集落であった可能性もあろう。南小山廃寺については、寺域が確定せず、不明な点が多いが、当地域の古代の様相を考える上で今後、周辺部の更なる調査の蓄積が必要である。

注

（１）尾野善裕2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構成」『須恵器の出現から消滅』東海土器研究会
　　出土須恵器の時期については、斎藤理からご教示を得た。

（２）伊藤春夫1986『南小山廃寺発掘調査報告』多度町教育委員会

（３）多度町教育委員会編2002「南小山廃寺」『多度町史』資料編１　考古・古代・中世

（４）当遺跡周辺では、天王平遺跡で２点出土している。
　　石神教親ほか2003『天王平遺跡発掘調査報告―第４・５・６次―』多度町教育委員会



図19　中ノ谷遺跡と南小山廃寺

図版１　発掘調査区遠景、全景



発掘調査区遠景（西から）



発掘調査区全景（東から）

図版２　発掘調査区近景



発掘調査区北部（北から）



発掘調査区中央部（東から）

図版３　SH１・２（１）



SH１（北から）



SH１・２土層断面（南から）



SH１・２土層断面（東から）



SH１カマド（東から）



SH１　遺物出土状況（北から）



SH１カマド（北から）



SH１　遺物出土状況（東から）

図版４　SH１・２（２）



SH１・２（西から）



SH１・２（北から）

図版５　SA１、SK１



SA１（南から）



SA１―P１土層断面（西から）



SA１―P２土層断面（西から）



SA１―P３土層断面（西から）



SA１―P５土層断面（西から）



SA１―P４土層断面（西から）

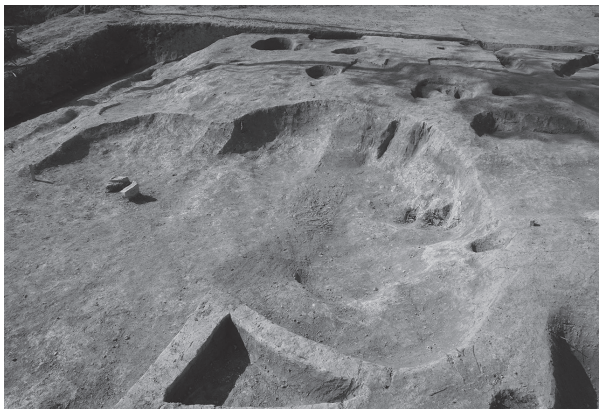


SK１土層断面（西から）

図版 6　SK 2 ～ 5、発掘調査区近景



SK 3 土層断面（東から）



SK 3 ・ 4 （南から）



SK 2 （北から）



SK 5 （西から）



発掘調査区南部（東から）

図版７　出土遺物（１）

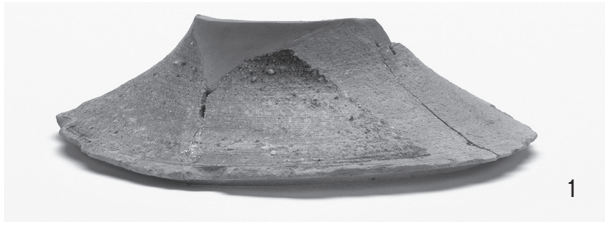

20

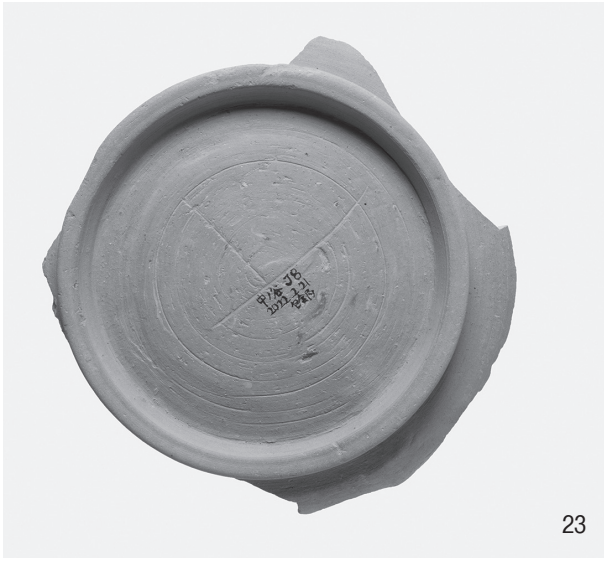

21

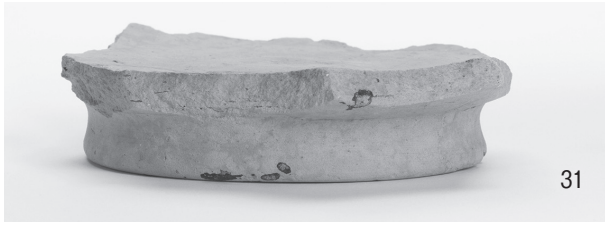

8


26


19


1

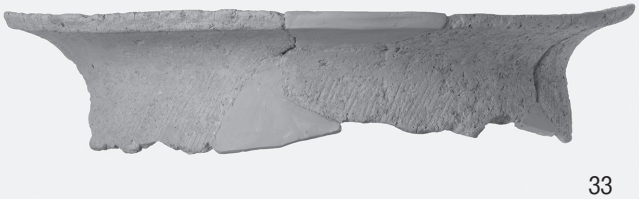

23


31


30


14

図版 8　出土遺物（2）



33



6



34



35



36

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかのたにいせき							
書名	中ノ谷遺跡							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	濵辺一機、竹内英昭							
編集機関	桑名市教育委員会							
所在地	〒511-8601　三重県桑名市中央町２丁目37番地							
発行年月日	2023年３月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				㎡	
なかのたにいせき	みえけんくわなしたどちょうおやまあざなかのたにほか	209	b54	35° 07′ 27″	136° 37′ 54″	20211202 ～ 20220301	1189	土地区画整理
中ノ谷遺跡	三重県桑名市多度町小山字中ノ谷他							
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中ノ谷遺跡	散布地	奈良時代		竪穴建物 柵列 土坑、溝		須恵器 土師器 土製品、石製品 石器		

中ノ谷遺跡発掘調査報告書

編集・発行　桑名市教育委員会
〒511-8601　三重県桑名市中央町２丁目37番地

印　　刷　西濃印刷株式会社

発　行　日　令和５年３月31日